

東南アジア三カ国視察メモ【マレーシア篇】

2016年2月28日～2018年8月19日

横山義志

目次

メモ 30	パダンからクアラルンプールへ マレーシアの言語・民族・歴史	2
メモ 31	トッカータ・スタジオ／マレーシアの教育制度	7
メモ 32	マレーシアの教育2 ASWARA 演劇学部長ウォン・オイミンさんのお話	9
メモ 33	マレーシアの教育3 ASWARA 前ダンス学部長ジョセフ・ゴンザレスさんのお話	11
メモ 34	「マレー諸島」を延長してみる	12
メモ 35	マーク・テ『Baling』はなぜ危険か？ マレーシアの政治状況	14
メモ 36	ジョージタウン・フェスティバルとワヤンクリ ～ペナン州とクランタン州、二つのグローバルスタンダード～	16
	・野党の牙城としてのペナン州とクランタン州	17
	・ジョージタウン・フェスティバルとペナン州	18
	・チー・セクティムとシンケ	21
	・クランタン州のワヤンクリ	21
	・クランタン州におけるマヨンの禁止	23
	・クランタン州と全マレーシア・イスラム党	24
	・マレー語演劇とイスラム化	30
	・「現代演劇」や「コンテンポラリーダンス」というバイアスを通じてマレーシア社会を見ることの危うさ	31
メモ 37	翻訳劇的身体、あるいは日本人はどのくらいバナナか	31
メモ 38	『民族という虚構』	35
メモ 39	APP ワンデイ・サミットとトッカータ・スタジオ『宇宙時代』	36
メモ 40	ファイサル・ムスタファとマレー語演劇	39
メモ 41	ビルキス・ヒージャスとレジデンス施設リンブン・ダハン	40
メモ 42	マハティール新政権発足後の状況	47
メモ 43	『ストライプス・アンド・ストロークス』、性的多様性をめぐる新政権の対応	49
メモ 44	マレーシア華人の言語状況	55
メモ 45	西尾佳織／リー・レンシン『どうにか生きていく Navigating living』	55
メモ 46	ジョージタウン・フェスティバル 2018	57

2016年2月28日

### メモ 30 パダンからクアラルンプールへ マレーシアの言語・民族・歴史

クアラルンプール着。よく考えればパダンからジャカルタに戻らず、直行したほうが早かった。ジャカルタに荷物を置いてきたせいで一日損してしまった。なかなか予定が立てにくい旅なので仕方のないところ。この地域を旅するには、国境よりも地理的関係をきちんと理解しておくのが大事になる。

パダンがあるスマトラ島はマレー人住民が多数を占め、文化的にはジャカルタがある南のジャワ島より北のマレー半島と近縁性があるように思える。インドネシア語とマレーシア語は似ているとよく言われるが、インドネシア語のもとになったとされるマレー語リアウ州方言はスマトラ島中部のマレー人の言葉。マレーシアの国語は「マレーシア語 (bahasa Malaysia)」とも、単に「マレー語 (bahasa Melayu)」とも呼ばれる。同系統のマレー人の言葉なので、似ていて当然ではある。ミナンカバウ語も比較的インドネシア語・マレーシア語に近く、ジャワ語とはだいぶ異なる。だが、ミナンカバウ語もジャワ語も、マレーシアの定義においては「マレー人」の言葉には違いない。

「マレーシア語」と「マレー語」のどちらの呼称を選ぶかは、「マレーシア人」の言語なのか、「マレー人」の言語なのか、そしてそもそも「マレー人」とは何か（他国にも「マレー人」はいるのか）といった、複雑な政治的判断を伴うことになる。憲法上の国語は「マレー語」だが、今では公式には「マレーシア語」のほうがよく使われる。アンワル・イブラヒムが教育相のときには、「マレー語」が公式表記とされたこともあった。

だがマレーシアも人口約3200万人と、かなり大きな国なので、インドネシアの感覚なら、数十の民族や言語圏に分かれていてもいいところだろう。1957年独立時のマラヤ連邦は9の首長国（スルタンがいる州）と2つの州（スルタンがいないペナン州とマラッカ州）の連合体だった。マレーシアの「マレー語」には10の方言があるとされる。ボルネオ島では「別の国」のブルネイのマレー語が標準として用いられていたりもする。マレーシアのマレー半島部では41の言語、ボルネオ島も含めた全体では137の言語が話されているという。

[https://en.wikipedia.org/wiki/Malaysian\\_language](https://en.wikipedia.org/wiki/Malaysian_language)

[https://en.wikipedia.org/wiki/Languages\\_of\\_Malaysia](https://en.wikipedia.org/wiki/Languages_of_Malaysia)

クアラルンプールはマニラやジャカルタとは別世界。中心部はむしろシンガポールに似た近代都市。



ペトロナスツインタワーと開発中の市街地

マニラやジャカルタでは、空港から出て、ぼらずにちゃんと目的地まで連れて行ってくれるタクシーを見極めるのが勝負だが、クアラルンプールでは、気の遠くなるような渋滞に巻き込まれることもなく市街の中心部まで行ってくれる便利な電車があったりする。計算してみると電車料金がけっこう高く、ジャカルタのタクシー料金と大して変わらなかったりもするが。マレーシアではGrabも便利。

一人当たりGDPは1万ドルを超え、フィリピンの二倍、インドネシアの三倍といったところ。マレーシアは1980年代からのルックイースト政策で、日本や韓国にたくさんの留学生を送り、経済構造転換の原動力とさせた。今では電子工業が基幹産業。

もう一つ大きく違うのは華人の割合。人口の3割にも及ぶ。マレー半島は比較的人口が少なかったこともあり、英国の植民地政府は19世紀に多くの華人とインド人を労働力として流入させた。これによってゴムや錫など植民地下の産業の多くが華人やインド人によって担われることになり、華人が経済活動のなかで非常に大きな位置を占める社会構造となった。一方、マレー人の多くは農業に従事しており、大きな所得格差が生まれた。

マレーシアの舞台芸術の状況を理解するには、まずこの社会構造と「民族」をめぐる問題を知っておく必要がある。フィリピンやインドネシアではまず「民族 (race)」という言葉聞く機会はなかったが、マレーシアでは「民族 (race)」を問わずにはいられない状況がある。2000年の人口統計ではマレー人が約51%、その他先住民が約11% (この二つを合わせた「ブミプトラ (土地の子)」が約62%)、華人が約24%、インド人が約7%。

[https://link.springer.com/chapter/10.1007/978-3-319-20095-8\\_8](https://link.springer.com/chapter/10.1007/978-3-319-20095-8_8)

このような統計が可能になるのは、誰もがどの民族に属するのかを明示しなければならない仕組みがあるからに他ならない。この「マレー人 (Malay)」か「華人 (Chinese)」か「インド人 (Indian)」か、という分類は、もともとイギリス領マラヤの植民地政府の人口統計によって作られた枠組みだった。このように植民地時代の分類が「国民」や「民族」の枠組みへと実体化されていったケースは少なくない。

(マレーシアについてはベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳、書籍工房早川、2007年、275頁以下を参照。Malayを「マレー人」とするか「マレー人」とするかは迷ったが、マレーシアの法・政治システムがこれらの「民族」の排他的区別に基づいていることを鑑みて、ここでは「~人」という表記を採用した。)

1957年の独立時は、民族ごとに政党が結成され、三民族を代表する政党が連合した。「首相は与党連合の最大党派から選ばれる」ということになっているため、華人やインド人に生まれた時点で、マレーシア首相になることはほぼないと言ってよい。(※2016年現在。この状況は変化しつつある。)



与党連合国民戦線の一角を占める（※2016年時点）華人政党「マレーシア華人協会（MCA）」本部

<http://www.mca.org.my/3>

[https://en.wikipedia.org/wiki/Malaysian\\_Chinese\\_Association](https://en.wikipedia.org/wiki/Malaysian_Chinese_Association)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%82%A2%E8%8F%AF%E4%BA%BA%E5%8D%94%E4%BC%9A>

1963年、マラヤ連邦はボルネオ島のサバ州・サラワク州とともにマレーシア連邦を結成。これによってマレー人＋先住民で、華人に対する人口上の優位が確立される。そして1965年、華人が過半数を占めるシンガポールがマレーシア中央政府との対立の末、マレーシア連邦から追放される形で独立することになる。これによってさらにマレーシア連邦内でのマレー人の人口上の優位が確立されることとなった。

1969年には総選挙時にマレーシアでもマレー人と華人の間で大規模な抗争が起き（5月13日事件）、1971年から、就労や教育においてマレー人並びに先住民系を優先させ、民族間の経済的均衡を目指す「ブミプトラ（土地の子）」政策が始まる。ここには1960年代にはじまった米国のアフターマティブ・アクションの影響もあるだろう。

ブミプトラ政策について

<http://www.iti.or.jp/kikan65/65onozawa.pdf>

[http://jams92.org/pdf/MSJ01/msj01\(002\)\\_onozawa.pdf](http://jams92.org/pdf/MSJ01/msj01(002)_onozawa.pdf)

この政策が意味するのは、この国においては、「マレーシア人」である以前に、「マレー人」か「華人」か「インド人」か、あるいは「先住民族」なのか、ということ問われるということである。これは華人の側から見れば、「マレー人」に同化しなくても、「華人」のままでも「マレーシア人」になることはできる、という仕組みであり、一方で「華人」である限り永遠に「土地の子」にはなれない、という仕組みでもある。

この「ブミプトラ（土地の子）」＝「マレー人」＋「先住民族」／「土地の子」でない人々＝「華人」＋「インド人」、という対立の枠組みが固定されたのは新たな状況だということ強調しておくべきだろう。それ以前は、たとえばマレーシアには「ババ（男性）／ニョニヤ（女性）」と呼ばれるマレー化した華人の子孫たちの集団が定着し、独自の文化を育んできた。このなかには道教など中国由来の宗教を信仰している人々もいれば、ムスリムもいる。ところが、ブミプトラ政策下では、マレー人か華人か、という選択を迫られることになる。

ババ・ニョニヤ、プラナカン

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%97%E3%83%A9%E3%83%8A%E3%82%AB%E3%83%B3>

マレーシアの身分証では、イスラム教徒であれば写真の下にislamと表記され、その場合は特定のケース（飲酒・同性愛行為の禁止など）でイスラム法（シャリーア）が適応されることになる。植民地時代のマラヤ王国連邦では、「マレー人」はスルタンの法廷において、イスラム法に則って裁かれることになっていた。そのため、独立後のマレーシアでは「マレー人＝イスラム教徒」という法制上の定義がなされることになる。マレーシア連邦憲法第160条では、「マレー人とはイスラムを信仰し、日常的にマレー語を話し、マレー人の慣習に従うもののことである」と定義されている。これを字義通りに解釈すれば、出自がどうであろうと（中華系であろうがインド系であろうが）上記を満たしていれば「マレー人」であり、逆にムスリムでなければマレー人の出自でマレー語を話していても法的には「マレー人」ではない、ということになる。非マレー人がマレー人と結婚するには、原則として、イスラムに改宗しなければならない。逆に、マレー人がイスラム教以外に改宗するのも、この憲法の規定自体を問う行為となり、極めてむずかしい。

リナ・ジョイは「棄教」できるか？——現代マレーシアのイスラムと改宗

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/furuta-semi/articles/mitsunari20071109.html>

この政治的状況から、マレーシアでは他のマレー諸国と比べれば、それぞれの「民族」がそれぞれにアイデンティティを主張し、別個に小社会を形成する傾向が比較的強い。とはいえ、「チャイナタウン」などはあるものの、完全に民族が固まって住ん

でいるわけでは全くなく、レストランで中華系とインド系がマレー語で談笑している姿も見かける。

だが、とりわけ1980年代にマハティール政権下でイスラム化政策が推し進められ、近年民衆レベルでも原理主義なイスラムを支持する傾向があり、分断が進んでいる様子も垣間見える。たとえば最近マレー人はハラール認証を受けていないレストランには入りにくくなっているという。となると、豚肉がメインの中華料理屋に足を踏み入れるわけにはいかないので、マレー人と中華系の会食の場が限られることになる。

とはいえもちろん交流がないわけではなく、この分断に橋を架けることが、マレーシアのアーティストたちにとっての大きな課題の一つになっているようだ。

2016年2月29日

### メモ31 トッカータ・スタジオ／マレーシアの教育制度

今回クアラルンプールでお世話になっているトッカータ・スタジオ（音楽・舞台芸術作品をプロデュースしているNGO組織）は、作曲家のング・ Chol・グアン（Ng Chor Guan, 黄楚原）が芸術監督でメインアーティスト。



トッカータ・スタジオ

<http://www.toccatastudio.com/>

舞台作品の作曲を主に手がけているかなり貴重な作曲家で、東南アジアのみならず世界各地で数多くの演出家や振付家に楽曲を提供している。

『宇宙時代Space Age』という作品の製作中。マハティール時代の「ワワサン（ビジョン）2020」構想のなかで想像された21世紀の（民族対立が乗り越えられたはずの）「宇宙時代」をテーマとしている。（マハティールはすでに「ワワサン2020」の実現可能性が遠のいたことを示唆している。）

<http://www.malaysia-navi.jp/news/?mode=d&i=4464>

作品づくりのための市民ディスカッションに参加。参加してくれた「市民」はほぼ華人ばかりなのに、英語でのディスカッションで、私のために気を使ってくれているのかと思ったが、よく聞いてみると、そもそも「普通話（標準中国語）」ができなかったり、英語が母語だったりする華人もいるようだった。

トッカータ・スタジオのプロデューサー、イー جان・タンさん（E-Jan Tan, とりあえず英語表記に従ってカタカナ表記しておく）から、マレーシアの教育制度についてお話をうかがった。（うろ覚えのところもあり、きちんと裏付け調査ができていないので、よくご存じの方はぜひご教示ください。）

小学校はマレー人向け、華人向け、インド人向けの三種類あり、それぞれの言語で教育を受けることができる。マレーシアでは高校は5年間（国立大学に行くためにはさらに2年間）。中等教育以降、公立高校では主にマレー語で、他に英語と、民族の言葉を学ぶことができる（インド人の場合の選択肢はタミル語か英語）。華人はマレー語、英語、中国語（北京語）の三言語を学ぶことになる。他に華人向け・インド人向けの私立中学校・高校があり、こちらはそれぞれの言語で教育を受けることができる。公立大学での教育はマレー語か英語。全て公立に行ったイー جانの場合、小学校では中国語、高校ではマレー語、大学では英語で教育を受けることになった。

1969年のマレー人と華人の対立では、中国語での中等教育が公教育として行われうるか否かも大きな焦点になっていた。その後、中華系私立高校のいくつかが公立になった。ある中華系高校では、校長が資金難に耐えかねて、政府の提案を受け入れ、公立化された。その後、校長はこの決定に不満を持つ華人に暗殺された。

現在は中華系公立高校でも授業は基本的にマレー語で、中国語の時間が週に数時間。もともと政府と中華系高校との合意では週10時間以上中国語の時間が設けられるはずだったが、この約束は反故になった。

一方、私立の中華高校では、全ての教科が中国語で教えられ、歴史の時間には中国の歴史が教えられる。ング・チョル・グアンは私立の中華系高校出身で、高校まではマレー人の友達が一人もいなかった。ロンドンに留学して、はじめて「同じマレーシア人」として、マレー人と友達になれたという。イー ジャンもグアンとともにロンドンの大学で音楽を学んでいる。

マレーシアの芸術教育は小学校のみ。それを補完するために、トッカータ・スタジオでは子どもを芸術に触れさせるためのワークショップToccapolyを年4回開催している。

<https://www.youtube.com/watch?v=bgjX6qSRPmQ&feature=youtu.be>

公立大学には「ブミプトラ（マレー人＋先住民）70%、華人20%、インド人10%」といった枠があり（人口比はマレー人・先住民が約67%、華人が約25%、インド人が約7%）、華人は競争率が高くなるので、欧米や台湾・中国などに留学する学生も多く、そのまま現地で職を見つけて帰って来ない場合も少なくない。1970年から2010年にかけて、華人の人口割合は10%近く低下している。ブミプトラ／マレー人の優位が確立されたという意味では、ブミプトラ政策成功の成果といってもいいのかもしれない。

[https://www.toyro.co.jp/img/img-report/b.asia\\_1707.pdf](https://www.toyro.co.jp/img/img-report/b.asia_1707.pdf)

マレーシアでアーティストとして生きていくのは（とりわけ華人やインド人には）かなり厳しいので、あえてマレーシアに戻ってきて活動しているアーティストには、かなりマレーシアへの思い入れがあると考えていいだろう。

## メモ 32 マレーシアの教育 2 ASWARA 演劇学部長ウォン・オイミンさんのお話

2016年3月1日

ASWARA (AKADEMI SENI BUDAYA DAN WARISAN KEBANGSAAN, 国立芸術・文化・遺産アカデミー) は大学に相当する国立芸術学校で1994年に開設（2006年に現在の名前に改称）。もともとは伝統芸能等の担い手を育成するために作られ、文化芸術観光省の管轄だったが、現在は教育省管轄の大学へと移行するための準備を進めている。音楽、ダンス、演劇、創作文芸、映画・テレビ、アーツ・文化マネジメント、アニメーション・マルチメディア、ヴィジュアル・コミュニケーション・デザインの9つの学部がある。



<http://www.aswara.edu.my/web/en/>

演劇学部長のウォン・オイミン（黄愛明, Wong Oi Min）さんにお話をうかがった。

現在、演劇学部の学生は55人で、うち52人がマレー人、2人が中国系、1人がインド系。ほとんどの先生はマレー語で授業をしていて、マレー人以外の学生が入りにくい状況になっている。オイミンさんは昨年、中国系としてはASWARA開設以来はじめての演劇学部長となった。

オイミンさんは日本大学芸術学部で博士号を取得している。演劇における伝統と現代性という問題を考えているときに、蜷川幸雄演出『メデシア』と出会い、他にあまりやっていない人がいない日本演劇を学んでみようと思ったという。日本では野田秀樹、解体社、OM-2、平田オリザ、宮城聡の他、舞踏の公演などをよくご覧になっていたとのこと。マレー人の先生方は多くはマレーシア国内の演劇が関心の中心となっているが、オイミンさんは日本で欧米やアジア諸国の演劇人とも出会っていて、海外のネットワークが豊富なことも学部長就任の決め手の一つになったらしい。現在、学部のカリキュラム改革に奔走中。

演技メソッドとしてはスタニスラフスキーやグロトフスキー、ビューポイントなどを教えていらっしゃるとのこと。

オイミンさんは2015年・2016年F/Tでも来日なさっている。

<http://www.festival-tokyo.jp/15/program/talk/>

<http://www.festival-tokyo.jp/16/program/bondings/>

### **メモ 33 マレーシアの教育 3 ASWARA 前ダンス学部長ジョセフ・ゴンザレスさんのお話**

2016年3月2日

つづいて前ダンス学部長ジョセフ・ゴンザレス (Joseph Victor Gonzalez) さんのお話。ジョセフさんはASWARA立ち上げに関わり、創立から20年近くにわたってダンス学部長を務めた。また、ASWARAの卒業生を中心に設立され、国内で唯一フルタイムのダンサーを雇用しているコンテンポラリーダンスのカンパニー、アスワラ・ダンス・カンパニー (ASWARA Dance Company) を運営。今回はその稽古を見せてもらった。

<http://www.aswara.edu.my/web/en/faculty-of-dance/>

<http://aswaradancecompany.blogspot.my/>

<http://www.festival-tokyo.jp/15/program/talk/>

ASWARA Dance Companyの次回公演のメンバーは男性5人、女性5人。男性は全員マレー人だが、女性はマレー人1人、中国系1人、インド系3人。演劇よりも非マレー人が多い。作品の稽古のあと、ダンサーたちが、学校で習ったマレー・インド・中国等々の伝統舞踊や武術の型を見せてくれた。自分の出自にとらわれず、全員がシラット (マレー武術) やバラタナティヤム (南インド古典舞踊)、チベット舞踊などを習得している。

これはジョセフの教育方針の賜物。ジョセフは大学卒業後にイギリスに留学し、ミュージカルで活躍した。マレーシア人ではじめてウェストエンドに進出。『大様と私』で松本幸四郎と共演したこともある。マレーシアに帰国し、ASWARAで教えはじめた。はじめはイギリスで学んだバレエ、モダンダンス、コンテンポラリーダンスを中心に教えていたが、徐々にそれに疑問を持つようになり、マレーシアやインド・中国などの伝統芸能に関する研究に着手。教育・研究と同時に振付活動もはじめ、1998年にはアンワル元首相逮捕事件を扱った作品で、はじめて伝統芸能の要素を取り入れた作品を発表した。近年は学生をボルネオ島 (一部がマレーシア領になっている) などに派遣し、失われつつある伝統舞踊を身をもって採集させる試みをつづけている。

昨年はマヨン (Mak Yong) と呼ばれるマレーの民族舞踊をもとにした作品を発表。この形式では、通常王の役を女性が踊る。ここでは今年の総選挙に合わせ、王を観客に投票で選ばせた。

<http://www.criticsrepublic.com/2015/12/23/what-the-pakyung-did-next-surprised-everyone/>

<http://web.usm.my/makyong/makyong.asp?CategoryId=1&MenuId=28>

当初はマレー人が多かったが、ダンスを通じた民族融和を目指すジョセフの取り組みにより、2007年にはじめて中国系の学生が卒業。ダンスには言葉を超え、民族を超える力がある、とジョセフは言う。

学生数も男女ほぼ同数。特に性別による定員があるわけではないが、男性の志望者も多いらしい。生徒のほとんどは大してダンス経験がなく、とりわけ男の子は、マレー人のスポーツマンが多い。今は6学年で70人で、マレー人約70%、インド系約15%、中国系がそれより少し少ない程度とのこと。人口比からすると中国系の方が多くなりそうなものだが、ジョセフがインド系だということもあるのかも知れない。特に民族ごとの定員があるわけではないという。

毎年20人前後が入学。国立なので学費はかなり安く、年間数万円といったところ。それでも、マレーシアでは（実業とはほど遠い）ダンサーを志望する若者はそれほど多くないので、競争率はあまり高くなく、「モチベーションがあれば入れる」という。ただ、途中で試験に落ちたり、テレビなどの仕事が入ってプロになってやめる学生もけっこういる。多くのダンサーは国立の民族芸能舞踊団に。観光客や外国の要人向けの仕事で、給料は高くないが、十分食べてはいける。だがもちろん、アスワラ・ダンス・カンパニーに入ったりしながら、コンテンポラリーダンスを志す卒業生も多い。マレーシアにもクラウド・ゲイト舞踊団（台湾）やアルヴィン・エイリー・アメリカン・ダンス・シアター（アフリカ系米国人を主体とするカンパニー）などのような世界的評価を得るコンテンポラリーダンスのカンパニーがマレーシアの風土から生まれるようになるのがジョセフの夢だという。

…そのジョセフさん、このあと香港に移住し、香港演芸学院（The Hong Kong Academy for Performing Arts）の「アカデミック・アンド・コンテクスチュアル・スタディーズ」学科長に就任なさったそうだ。アスワラ・ダンス・カンパニーの芸術監督はつづけていらっしゃるといふ。

<https://www.hkapa.edu/faculty/gonzales-joseph>

[https://en.wikipedia.org/wiki/Joseph\\_Victor\\_Gonzales](https://en.wikipedia.org/wiki/Joseph_Victor_Gonzales)

### メモ 34 「マレー諸島」を延長してみる

2016年3月3日

国境を取り外して、地図を眺めてみることに。

毎日「ナシ・チャンプルNasi Campur（マレー語で「混ぜごはん」）」の看板を見てみると、南西諸島もマレー文化圏のような気がしてならない（沖縄の「チャンプルー」の語源には諸説ある）。「マレー諸島」を少し延長すれば、台湾・南西諸島・日本列島も入ってくる。



少なくとも戦前においては、日本人はマレー人、朝鮮人、アイヌ人等々を含め、様々な民族から成り立った混合民族だ、というのが公式見解で、それが台湾や朝鮮半島、さらには南方の植民地化を正当化する論理の一つともなっていた（小熊英二『単一民族神話の起源』）。そしてジャレド・ダイヤモンドによれば、マレー諸島に住むマレー人の起源は今の中国南部にあり、台湾を経由して南下して行ったのだという（『銃・病原菌・鉄』）。

だとすると、マレー諸島が「外中華圏」をなしていることも納得しやすい気がする。マレーシア、インドネシア、フィリピン、シンガポールをとりあえず「マレー諸国」と名づけてみるとすれば、一人あたりGDPの順番は、およそ中国大陸系住民の割合が多い順と一致する。（ただし、マレーシア以外では「華人」が必ずしも明確に区別されているわけではないので、ちゃんとした統計は取りようがないが。また、ブルネイは例外。）一方で、その分中国系とマレー人のあいだの軋轢も折に触れて生じている。ここに台湾と日本を入れてみると、どうだろうか。

「いなばの白うさぎ」の話。日本には「ウニ」はいないが、なぜかうさぎが「ウニ」を騙すことになっている。この話をマレーシア人にすれば、「サン・カンチルとブアヤ (Sang Kancil and Buaya) の話？」と返ってくる。アニメになったりもしている有

名な話らしい。ブアヤはワニだが、サン・カンチルはウサギではなくマメジカ。東南アジアにはウサギは自生していなかったという。

[https://en.wikipedia.org/wiki/Kancil\\_Story](https://en.wikipedia.org/wiki/Kancil_Story)

つまり、この話はおそらく東南アジアから日本にやってきて、いつの間にかマメジカはウサギになったが、「ワニ」というものの得体の知れない恐ろしいイメージだけは残ったらしい。そしてベーリング海峡を越えて、さらにアメリカ大陸にまで伝わっている。そこでは「ワニ」がクロコダイルからアリゲーターになって、ふたたび実体を取り戻したりもする。とすると、フィリピンや日本と米国の縁の深さもなんだか分かってくる気もする。

[http://spac.or.jp/inaba-to-nabaho-no-shirousagi\\_tour2016.html](http://spac.or.jp/inaba-to-nabaho-no-shirousagi_tour2016.html)

さすがにアメリカ大陸まで「マレー諸島」というのには無理があるだろうが、ヒトその他の生き物が長い月日をかけて島の連なりを伝えていった様子を想像しながら、マレーシアから日本列島までを逆にたどってみると、見えてくるものがあるのかも知れない。

### メモ 35 マーク・テ『Baling』はなぜ危険か？ マレーシアの政治状況

2016年3月4日

今年TPAMで上演されたマーク・テ/ファイヴ・アーツ・センター『Baling』について、シンガポール人の友人が、「これはシンガポールでは上演できないだろう。マレーシアでもペナンならできるかも知れないけど、クアラルンプールでは難しいのではないか」という話をしていた。今回ファイヴ・アーツ・センターにマークを訪ねたら、ちょうど『Baling』の稽古中で、アラブ首長国連邦で公演したあと、クアラルンプールのファイヴ・アーツ・センターでも上演の予定だという。会場が小さいので、定員30人~50人くらいで、6回公演とのこと。

マーク・テ『Baling』

<https://www.tpam.or.jp/2016/en/?program=baling>

『Baling』では、1955年に行われたマレーシア共産党の処遇に関する協議（通称「バリントーク」）を扱っている。マレーシア共産党は第二次大戦中、イギリス軍の援助も得て対日抗争を主導してきたが、戦後マレーシアに戻ってきたイギリス植民地政府は1948年から共産党の弾圧をはじめ、チン・ペン率いる共産党はジャングルを根拠地としてゲリラ活動を開始した。一方、1955年には独立を前に初めての総選挙が行われ、統一マレー国民組織（UMNO）のトゥンク・アブドゥル・ラーマンが首相になる。そして共産党書記長チン・ペンに投降を呼びかけ、シンガポール首相を交えて三者での協議が行われた。

マレーシアでもシンガポールでもインドネシアでも、共産主義活動が厳しく規制されていて、少しでも公に共産主義を擁護するような発言をすると、逮捕される可能性

もある。マレーシアではつい先日、マレーシア社会党（下院で1議席を確保している）によるマルクス勉強会が警察によって中止に追い込まれたばかり。

<https://www.malaysiakini.com/news/332433#.VtbW11D0Vzk>. facebook

主に英語上演の『Baling』については、特に事前に台本を届け出る必要はないらしいが（より多くの人に伝わるマレー語の場合は扱いが違うという）、マークも今回のクアラルンプール公演を安全に行うために対策を考えているよう。

だがいずれにしても、マークらがこの作品を作ったのはマレーシア共産党を復権させるためではない。この作品の意義は、現在の「マレーシア」という国の有り様そのものを問うことだろう。『Baling』では、マレーシアを追われたチン・ペンが「祖国」への帰還を切望していたことが強調されている。バリン・トークで、大きな焦点の一つとなっていたのは、華人が多数を占めるマレーシア共産党員は、はたして中国ではなく、マラヤ連邦に「忠誠」を尽くすようになりうるのか、という問題だった。トゥンクは「党員が国外に脱出したいなら手段は用意する」と、チン・ペンにしきりに亡命を勧める。実はシンガポールが独立する前のマレーシアにおいては、華人が人口の過半数を占める可能性があった。そして華人のなかでは共産党を含めた左派の支持者が多数派だった。マレー人住民を支持基盤とするトゥンクにとって、華人の動向は政治生命を左右する問題だった。

バリン・トークでの交渉が決裂し、ゲリラ活動に戻ったチン・ペンらは、やがて隣国タイなどに亡命していく。そして統一マレー国民組織と反共の華人組織であるマレーシア華人協会、インド国民会議をモデルとしたマレーシア・インド人会議の三党連合による国民戦線が与党として政府を形成する仕組みが、現在までつづいている。この三民族政党体制のなかで、「マレー人」、「華人」、「インド人」という区別が実体化されていったわけである。

さらにボルネオ島の一部がマレーシアに加わり（1963年）、シンガポールが独立したために（1965年）、「マレー人+先住民」の「華人」に対する人口的優位がなんとか確保された。1969年にマレー人と華人の抗争が起きて以降、両者の対立の原因となっている所得不均衡を調整するため、という名目で「マレー人+先住民」を優遇する、いわゆる「ブミプトラ（土地の子）」政策が1971年から施行され、民族の区別がいよいよ明確化されていく。

しかし近年では、華人とインド人の多くが、ブミプトラ政策をつづける国民戦線体制に大きな不満を抱き、与党離れが進んでいる。作曲家ング・チョル・グアン（中華系）はよくこんなことを言っている。「マレーシアは米国に似ている。国旗のデザインもそうだが、米国でもマレーシアでも、いろんな民族がそれぞれコミュニティを作って、それぞれの言語を話して暮らしている。ただし米国ではマイノリティが保護されるのに対して、マレーシアではマジョリティが保護されている。」

一方マレー人側でも、とりわけ1979年のイラン革命以降はイスラム急進派の影響が強くなっていて、近年イスラム法にもとづく国家建設を目指す全マレーシア・イスラム党が勢力を拡大している。このなか、2008年の総選挙では民主行動党・人民公正党・全マレーシア・イスラム党の野党連合が躍進し、州議会選挙では5州が野党政権に転じた。2013年の総選挙でも野党がさらに議席を伸ばしている。州議会では現在3州が野党政権。冒頭で「ペナンでは上演できるかも」という話があったのは、華人が多いペナン州では、民主行動党が第一党として政権与党になっているからだ。

ここで不思議なのは、民主行動党や人民公正党といった社会民主主義・リベラル派の政党と全マレーシア・イスラム党が手を組んでいること。マークに聞いてみたところ、少なくとも三者に共通するのは、「全ての民族に開かれている」ことだという。国民戦線を構成する政党は、自分が属している民族によって加入できる政党が異なる。だが、全マレーシア・イスラム党も、イスラム教徒でさえあればどの民族でも加入することができる（実際には大多数がマレー人だが）。

つまり、現在のマレーシア政界における最大の対立軸は、民族間の分離を維持するか、それを解体／融合するか、という点にある。『Baling』が今日のマレーシア社会において「危険」とみなされうるとすれば、それはこの作品が、今日のマレーシアの社会構成とは異なる「ナショナリティ」の可能性に近い過去に存在していたことに気づかせてくれるからだろう。そして我々にとって、この作品が日本という国のありようを考えさせられる契機となりうるとすれば、日本においても十分「危険」なのかも知れない。

マークは、この作品以前には、もっと日常的に目立った話題となっている新移民問題（近年バングラデシュなどから毎年150万人近い外国人労働者が来て、少なからぬ数が定着しているという）にPETA的手法で取り組んでいた。だが徐々に、根本的な問題に取り組むためには歴史を知る必要があると思い、バリン・トークに関する調査をはじめたという。一方で、今は、それだけでよいのかという思いもあり、次の作品ではもっと未来について考えたい、と語っていた。

### **メモ 36 ジョージタウン・フェスティバルとワヤンクリ ～ペナン州とクランタン州、二つのグローバルスタンダード～**

2016年3月11日

コンテンポラリーな舞台芸術に興味があつてマレーシアに来ると、どうしても中華系マレーシア人に出会う機会が多くなり、逆にマレー人でイスラム教徒、という多数派の声を聞く機会が少なくなる。舞台芸術というものを通じてマレーシアを知る、ということの難しさを理解するには、ペナン州とクランタン州のことを知っておく必要があるだろう。

そもそも「舞台芸術」を通じて世界を見る、ということにはかなり限界があるのではないか、ということ、ペナンに滞在しながらクランタンのお話を聞いて、考えさせられた。

### ・野党の牙城としてのペナン州とクランタン州

マレーシアのペナン州とクランタン州では野党が州政権を握っている。ペナン州の州都ジョージタウンでは、マレーシアで最も重要な舞台芸術祭の一つであるジョージタウン・フェスティバルが行われているが、主な資金を提供しているのはペナン州政府のようだ。国際交流基金ジャカルタ事務所の谷地田さんのお話では、昨年のジョージタウン・フェスティバルの開幕時に州首相臨席のもとでリミニ・プロトコルによる『100%ペナン』上演された。この作品では住民にかなり微妙な政治的質問が投げかけられる。この作品の上演が可能なのは、マレーシアでもこのペナン州くらいだろうという。

ジョージタウン・フェスティバル  
<https://georgetownfestival.com/>

なぜペナンなのか。これを理解するには、ふたたび少し歴史を遡っておく必要がある。ペナンには、その特殊な歴史ゆえに、イスラムとマレーの伝統の守護者であるスルタンがいない。そしてマレー半島の中でも、ペナンはシンガポールと並んで、とりわけ華人が多い。この島は英国による植民地化の基点になったところで、港湾労働や貿易のため、多くの華僑を受け入れてきた。この事情もシンガポールと似ている。

1963年にリー・クアンユー率いる民主行動党政権下のシンガポールがマラヤ連邦に加わり、マレーシア連邦が形成される。シンガポールには十分な市場も資源もなく、リー・クアンユーはシンガポールの孤立した独立を望んではいなかった。シンガポール加入により、マレーシアではマレー人と華人の人口比が縮まっていた。マレーシア全土での政治活動を開始したリー・クアンユーは、「マレーシア人のマレーシア」をスローガンに、多民族が平等に参加する社会を提案した。そして、本来の「ブミプトラ（土地の子）」は森に住む先住民であって、千年前から移住してきたマレー人も、数百年前から移住してきている華人やインド人と同様に移民に過ぎないと主張し、独立時の憲法で定められたマレー人の優位に疑問を呈した。リーは中国語よりも英語とマレー語で育った経緯もあり、華人以外からも支持を得ていた。『Baling』では、トゥンクがマラヤ共産党書記長のチン・ペンに「共産党が合法化されたら国が分裂する危険がある」と語る場面があったが、ここではまさに国を二分する状況が生まれていた。この意味で、トゥンクにとってリーはチン・ペンよりも危険な存在だったといえる。1965年5月、リーの「マレーシア人のマレーシア」に共鳴する野党5党により「マレーシア連帯会議」が発足。与党連合と非マレー人野党との間の緊張が高まっていく。トゥンクは苦渋の末、マレー人の優位を確保するための解決策を導き出す。リー・クアンユーに迫って、シンガポールをマラヤ連邦からむりやり独立させたのである。

この際、マラヤ連邦に留まった民主行動党のメンバーが結成したのが、現在ペナン州で政権を握っている民主行動党である。この前後、華人が権利主張を強めていき、1964年にシンガポール、1967年ペナン、1969年クアラルンプールとシンガポールで、マレー人と党支持者と華人主体の野党支持者のあいだの政治的抗争が暴動化する例が相次ぐ。

1969年5月10日の総選挙では、トゥンク率いる与党連合の国民戦線と民主行動党が熾烈な争いを繰り広げた。これはその後のマレーシアという国のありようを決定した選挙戦だったといっただろう。マレー人優遇をさらに推進しようとする国民戦線に対して、華人中心の民主行動党やマレーシア民政運動党は民族間の平等を主張した。この選挙で民主行動党とマレーシア民政運動党が国民戦線の地盤を切り崩して躍進。ペナン州議会ではマレーシア民政運動党が、クランタン州ではやはり野党の全マレーシア・イスラム党が政権を獲得した。そして5月13日、権利の主張を強める野党支持者と、危機感を強めた与党支持者とがついに衝突に至る（5.13事件）。

この後もマレーシアでは、マジョリティだが所得水準は華人よりも低いマレー人を優遇するか、諸民族の融合を目指すのか、という問いが政治的対立の軸となり、ペナン州とクランタン州が後者の二つの方向性を探る実験の場となっていった。

#### ・ジョージタウン・フェスティバルとペナン州

ペナン州でジョージタウン・フェスティバルがはじまったのは2010年。ジョー・シデックが2009年に、ペナン州から世界遺産登録を記念するイベントを依頼され、数日間開催したイベントが成功したのがきっかけだった。

# HEY, YOU!

**DATE** Saturday 3rd November 2012  
**TIME** 2:00pm-6:00pm  
**AUDITION** at The Canteen,  
 China House,  
 153 & 155 Beach Street &  
 783B Victoria Street,  
 George Town, Penang  
 Registration from  
 12:00 noon at  
 the venue

In 5 MINUTES (or before  
 Joe finishes peeling his orange),  
 excite us with your  
 ideas and proposals for  
**GEORGE TOWN  
 FESTIVAL 2013**  
 Open call for

ART ♥ MUSIC  
 DANCE ♥ THEATRE  
 MORE ♥

**GEORGE TOWN**

**FEATURED JUDGES :**  
 Joe S Cowell, Narelle M Lopez,  
 Randy Lim Chun Woei, plus two others?!

For more info call  
 04-261630  
 016-467442

ジョー・シデック

やがて恒例化して規模も拡大し、今では一ヶ月にわたって行われるようになってい  
る。この世界遺産登録も、ペナンにおける多民族共生の文化が評価されてのこと。舞  
台芸術だけでなく、美術、音楽、映画のプログラムも。



ジョージタウン・フェスティバル関連企画として制作された壁画「自転車に乗る子どもたち」

<https://www.travel.co.jp/guide/article/29099/>

世界遺産登録の前には、シンガポール人などがペナン島の土地に投資し、開発計画が持ち上がっていたが、これによって開発が不可能になり、手を引いていったという。この登録がなければ、ペナン島もシンガポールやクアラルンプールのような国際的商業都市になっていたのかもしれない。

ジョーは家業の生地会社を経営していたが、芸術に情熱を注ぎ、近年は世界各地のフェスティバルを視察している。TPAMにも二度参加し、ON-PAM（舞台芸術制作者オープンネットワーク）の会員になってくれたこともある。欧米やオーストラリア、ASEANとのネットワークを感じさせるプログラム。昨年は平田オリザ作・演出のロボット演劇『変身』も同フェスティバルに参加している。

### ・チー・セクティムとシンケ

ジョージタウンには近年、様々な事情でクアラルンプールから移住してきたアーティストもいる。その一人がファイヴ・アーツ・センターの主要メンバーの一人、チー・セクティム (Chee Sek Thiem)。セクティムはジョージタウン出身だが、20代でアメリカに留学して陶芸を学び、帰国後はクアラルンプールのファイヴ・アーツ・センターを拠点に演劇活動をつづけてきた。だが個人的な事情もあって、2010年にジョージタウンに戻り、昨年ゲストハウス兼アートギャラリー「シンケ (Sinkeh/新客, 19世紀以降に来た華僑を指して使われた言葉)」をオープンさせ、そこで若手演劇人にも仕事を提供しながら演劇活動をつづけている。(私もそこに滞在していたが、とても快適だった。)

セクティムもリー・クアンユーと同様、母語は英語。両親とも中国系だが、お互いの間でも英語を話していて、祖父母は広東語と福建語を話していた。祖父は英国やドイツから布を輸入して販売する仕事をしていた。F/T2015のトークで来日している。

<https://www.artscouncil-tokyo.jp/ja/events/8855/>

### ・クランタン州のワヤンクリ

そのセクティムの最新作『キッチン・トーク Cakap Dapur: R&D Stories』は、元国立マラヤ大学教授で、マレーシアの伝統芸能の研究で知られるモハメド・アニス (Mohd Anis Mohd Nor) 氏による三日間の講演を劇作家ロー・プエティン (Leow Puay Tin) が再構成したもの (アニス氏は休暇中で山のなかにいらっしやるとのことでお目にかかれなかった)。プエティンがセクティムに演出を依頼したところ、「今はジョージタウンに住んでいるのでクアラルンプールの俳優を演出するのは難しいので、自分で自分を演出するのでもいいか？」と逆提案し、自演のモノログとなった。マレー一人でマレー芸能の権威であるアニス氏を、華人のセクティムが、マレー語やマレー舞踊の身ぶりを交えて、生き活きと演じている。

# CAKAP DAPUR: R&D Stories

By Leow Puay Tin

Adapted from a workshop by Professor Mohd Anis Md Nor

Performed and directed by  
**Chee Sek Thim**

CAKAP DAPUR is an entertaining and thought-provoking collection of stories, musings and fragments of a lecture.

Presented as 25 text modules, the performance explores a range of themes - from the very personal to wider issues of nationhood, culture and identity.

CAKAP DAPUR also introduces the audience to some important concepts on creating a performance.

Come Cakap Dapur!

### Date & Time

5, 6 & 7 February 2015 - 8:30pm  
8 February 2015 - 3:00pm

### Venue

Black Box, DPAC (Damansara Performing Arts Centre),  
Empire Damansara, Jalan PJU 8/B, Damansara Perdana,  
47820 Petaling Jaya, Selangor

### Tickets

RM30.00, available at [www.dpac.com.my](http://www.dpac.com.my) or  
+603-4065 0001, 4065 0002

Cakap Dapur: R&D Stories is supported by the following partners:



### Production Team

Director & Performer:  
Visual Design:  
Lighting Design:  
Sound Design:  
Stage Manager:  
Publicity:  
Graphic Design:  
Producer:

Chee Sek Thim  
Ivri Nasution & Dian Fitri Tan  
Weezy Tan  
John Siew  
Hoe Jui Ting  
Siti Nurhayati Abu Hassan & FAC  
Grey Yeoh  
Suhaila Merican

A project under the Economic Transformation Programme (ETP) Malaysia.

<https://www.thestar.com.my/lifestyle/entertainment/arts/on-stage/2015/02/13/oneman-show-cakap-dapur-rd-stories-was-a-passionate-and-captivating-affair/>

(こちらではセクティムが「シンケ」で宿泊業をしながら作品の話をしているのが見られる。)

[https://www.youtube.com/watch?v=xWZZKB\\_MAR4](https://www.youtube.com/watch?v=xWZZKB_MAR4)

モハメド・アニスはきわめてアカデミックな手法で、マレーの伝統芸能においてイスラム以前の要素が大きく関与していることを指摘している。一方、近年マレーシアでは、イスラム化の風潮のなかで、多くの伝統芸能が上演されにくくなっている。たとえばワヤンクリ（影絵芝居）が最も盛んだったクランタン州では、州政府などから「イスラムの教義に適った演目を」という圧力がかかっている。ワヤンクリの主要演目はヒンドゥー教の聖典でもある『ラーマヤナ』。それでは伝統的な演目が上演できない、といって廃業してしまった人形使いもいるという。

クランタン州は芸能が盛んな地域だった。ジョージタウン・フェスティバルの創業者ジョー・シデックも、はじめてアートに触れたのは、父に連れられてクランタン州に行き、マヨン（Mak Yong）を観に行ったときだと語っている。

<https://www.straitstimes.com/lifestyle/entertainment/be-bold-and-love-people>

#### ・クランタン州におけるマヨンの禁止

モハメド・アニスの研究が重要なのは、ワヤンクリやマヨンといった伝統芸能が、マレーシアにおけるその中心地だったクランタン州で上演禁止となっているからだ。これを知って、はじめてジョゼフ・ゴンザレスがマヨンを取り入れた作品を作ったことの意義も分かった。

これらの芸能が州の法令で禁止されたのは1991年。それ以来、今年ですでに27年が経過している。クランタン州で1990年以来政権を握っているのは、同じ野党でも、マレーシアをイスラム国家とすることを目指している全マレーシア・イスラム党。同政権下で、スーパーのレジを男女別に分ける政策などとともに、ワヤンクリやマヨンの上演禁止、女性が舞台に立つことの禁止（観客に一人でも男性がいる場合）などの政策が施行された。

[http://jams92.org/pdf/NL40/40\(52\)\\_nakahashi.pdf](http://jams92.org/pdf/NL40/40(52)_nakahashi.pdf)

[https://en.wikipedia.org/wiki/Kelantan#Politics\\_and\\_government](https://en.wikipedia.org/wiki/Kelantan#Politics_and_government)

これらの伝統芸能は、近年まで、ローカルなムスリムの共同体によって支えられてきたものだ。これはローカルな実践を、中東中心の、いわば「グローバル・スタンダード」に合わせようとする試みと言ってもいいだろう。

マヨンでは、踊り手は女性で、男性の王を女性が演じたりもする。だがパーカッションの演奏をするのは男性。20世紀前半にはクランタンの宮廷によって保護され、発展してきた。ここにはアニミズムやヒンドゥー、仏教的要素も取り込まれている。全

マレーシア・イスラム党にとっては、「反イスラム的要素」が複数あるということなのだろう。

実はユネスコ世界無形文化遺産の「人類の口承及び無形遺産の傑作」リストに、2005年に記載されている。マレーシアからはこの時点では唯一。「無形文化遺産の保護に関する条約」は2003年にユネスコ総会で採択されたが、マレーシアはこの条約の批准を2013年まで10年にわたって先延ばしにしてきた。

<https://www.policyforum.net/dangerous-dancing/>

[http://www.accu.or.jp/masterpiece/23apa\\_jp.htm](http://www.accu.or.jp/masterpiece/23apa_jp.htm)

[https://en.wikipedia.org/wiki/Mak\\_yong](https://en.wikipedia.org/wiki/Mak_yong)

連邦政府は2005年、クランタンの州都コタバルに文化センターを建設し、そこでアニメイズム、ヒンドゥー、仏教的要素などを除去した形でのマヨンやワヤンクリの上演を認めさせている。また、マヨンはクランタン州以外では禁止されておらず、今でも政府観光局が観光プロモーションに使ってすらいる。

<http://blog-tourismmalaysia.jp/archives/2014-06.html>

今でも個人宅や研究者対象などで昔ながらのマヨンが上演される機会がなくはないらしいが、演者の高齢化が進み、興味を持つ若者も少ないので、存続は危ぶまれているという。

<https://nansei.exblog.jp/m2006-03-01/>

### ・クランタン州と全マレーシア・イスラム党

クランタン州ではペナン州とは対照的に、マレー人が9割以上を占めている。この二つの州は、ある意味で、マレーシアのなかで最も政治的に「先進的」な地域だといっている。

クランタン・マレー語は標準マレー語とは文法や発音もだいぶ異なり、表記についても、他州では一般的なラテン文字よりも、ジャウィー文字（マレー語独特の発音を表記できるようにしたアラビア文字）が広く使われている。ここからも、イスラム圏の「グローバルゼーション」の影響を受けやすい地域だといえるだろう。

全マレーシア・イスラム党は比較的世俗主義的だった統一マレー国民組織に飽き足らないイスラム教徒たちによって、1951年に結成された。幹部には中東の有名大学でイスラム法を学んだウラマーが多く、マレーシアのイスラム化推進の原動力にもなってきた。マレーシアでイスラム原理主義の風潮が高まったのは、とりわけ1979年のイラン革命以降。全マレーシア・イスラム党においては、ユソフ・ラワの登場が一つの転機となっている。結党時から参加していて、1969年の選挙では国政選挙でマハティールに競り勝ったこともある。1970年代までの党内ではマレー民族主義とイスラムとの結びつきが強く、統一マレー国民組織と連立政権を組むこともあった。だが1983年にユソフがウラマーたちの支持を受けて党首となると、イスラム原理主義色を強めると同時に、マレー民族主義から離れ、全ての民族を受け入れる方向に舵を切った（これにも彼の出身地の影響があるのかも知れない）。

[https://en.wikipedia.org/wiki/Yusof\\_Rawa](https://en.wikipedia.org/wiki/Yusof_Rawa)

このユソフは、実はペナン州ジョージタウン市アチェ通りの出身。この通りはアチェ王国（スマトラ島北部）のスルタンが建てたモスクで知られ、東南アジアからメッカに向かうムスリムたちが立ち寄って説教を聞いていたところ。つまり港町ジョージタウンは、中国大陸や英国だけでなく、イスラム世界に向かって開かれた窓でもあった。



ジョージタウン・アチェ通りのアチェ・モスク

民主行動党の多民族主義も全マレーシア・イスラム党の多民族主義も同じ港町を起源の一つとしているのだとすれば、一見水と油のようなこの二つの政党が、ある時期共闘し得たことも理解しやすいのかも知れない。

国政においては、原理主義的傾向を持つ全マレーシア・イスラム党以上に、現代生活に適合したイスラムを目指すイスラム青年運動のカリスマ的指導者アンワル・イブラヒムが大きな影響を持った。このアンワルもペナン州の出身で、華人が圧倒的多数を占めるペナン島対岸の町ブキッ・ムルタジャムで生まれている。妻のワン・アジザはシンガポール生まれで、プラナカン華人の血を引いている。

[https://en.wikipedia.org/wiki/Anwar\\_Ibrahim](https://en.wikipedia.org/wiki/Anwar_Ibrahim)

[https://en.wikipedia.org/wiki/Wan\\_Azizah\\_Wan\\_Ismail](https://en.wikipedia.org/wiki/Wan_Azizah_Wan_Ismail)

アンワルはマハティール首相に見出されて統一マレー国民組織に入党し、副首相まで務めたが、1997年のアジア通貨危機ではマハティールと対立して1998年に下野し、公然とマハティール批判を展開した際に逮捕され、職権濫用や同性愛の罪で起訴されて実刑判決を受けた（アンワルは2018年の総選挙後によりやく刑期を終えて出獄の予定）。1999年にはワン・アジザが新党国民公正党（2003年には人民公正党となる）を結成し、民主行動党と全マレーシア・イスラム党に共闘を呼びかけ、2008年には強力な野党連合「人民連盟」を形成することに成功した。この人民連盟は同年の総選挙を受け、ペナン州、スランゴール州、クダ州などで与党となった。

[https://en.wikipedia.org/wiki/Pakatan\\_Rakyat](https://en.wikipedia.org/wiki/Pakatan_Rakyat)

実は、1999年にアンワルに代わって副首相となり、2003年にマハティールに代わって首相となったアブドラ・バタウィもペナン州の出身。父型の祖父はメッカ出身で、ペナンで最初のムフティー（宗教指導者）となり、全マレーシア・イスラム党の結党にも関わっている。母方の祖父は海南島出身の回教徒。この特異な出自の指導者は信仰心厚く誠実な政治家として人気を得て、2004年の選挙で与党連合は圧勝したが、2008年の総選挙で野党連合の伸張を許したために、2009年に辞任して現首相のナジブ・ラザクが就任することになった。（ちなみにマハティールの父親はペナン出身のインド人。マレーシアの政治指導者がこれだけペナンに縁があるのは偶然ではないのだろう。）



ジョージタウンにあるムスリム中華料理店

前回2013年の総選挙では、「人民連盟」は51%の得票を得たが、議席数では40%に留まり、政権獲得には至らなかった。

[https://en.wikipedia.org/wiki/Malaysian\\_general\\_election,\\_2013](https://en.wikipedia.org/wiki/Malaysian_general_election,_2013)

2015年にはクランタン州で与党となっていた全マレーシア・イスラム党がイスラム刑法を厳格に適用する改正案を採決したことから、民主行動党と激しく対立し、人民連盟は解体された。また、全マレーシア・イスラム党の内部でも対立が生じ、一部議員が離党して「国民信託党」が結成され、民主行動党、人民公正党とともに新たな野党連合「希望連盟」が生み出された。

<http://www.malaysia-navi.jp/news/?mode=d&i=4326>

<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2015/04/post-3601.php>

フィリピン、インドネシア、マレーシアと、西に行くにつれて、空港でヒジャブ姿の女性を多く見かけるようになる。

**vivo**  
Camera & Music

*Dato Siti Nurhaliza*  
Dato Siti Nurhaliza

**KAMERA HADAPAN 20MP  
BERCAHAYA LEMBUT  
SWAFOTO SEMPURNA  
V5@ | V5Plus**

**MERU UTAMA**  
☎ 603-7495 3380/4

KJIA/SILA/06-01

クアラルンプール国際空港で見た携帯電話の広告

なかでもマレーシアは地理的にも経済的にも中東との結びつきが圧倒的に強い。東南アジアのイスラム教徒は、土着的な風習との折り合いが問題になるとき、マレーシアのウラマーの意見に従う場合が多いという。マレーシアのイスラムは、いわば中東で形成されていくイスラムのグローバル・スタンダードをマレー世界へと橋渡ししていく役割を果たしている。この意味で、ペナン州が西洋世界のグローバル・スタンダードを急進的に吸収しようとしているのに対して、クランタン州は（時としてペナンを經由して）中東に顔を向け、そのカウンターパートを演じているともいえるだろう。

一つ救いなのは、西洋と中東の二者択一ではなくなりつつある、ということだ。クランタン州のスルタンであるムハンマド五世（2016年12月にマレーシア国王に就任）は、敬虔なムスリムとして敬愛されているが、オクスフォード大学イスラム研究センターなど、ヨーロッパ諸国やカナダで外交やビジネスを学んでいる。

[https://en.wikipedia.org/wiki/Muhammad\\_V\\_of\\_Kelantan](https://en.wikipedia.org/wiki/Muhammad_V_of_Kelantan)

セクティムが教えてくれた以下の記事によれば、マレームスリムのアラブ化傾向は1980年代から顕著になり、その原因の一つはサウジ王家との結びつきによってワッハーブ派の思想が導入されたことだという。

<http://www.freemalaysiatoday.com/category/opinion/2016/03/27/malays-seeing-erosion-of-their-culture/>

とりわけナジブ時代にはサウジとの関係が深まり、サウジ主導の対テロ・イスラム軍事連合にも関わっている。

<https://thediplomat.com/2018/06/will-malaysia-end-its-military-presence-in-saudi-arabia/>

[https://en.wikipedia.org/wiki/Malaysia%E2%80%93Saudi\\_Arabia\\_relations](https://en.wikipedia.org/wiki/Malaysia%E2%80%93Saudi_Arabia_relations)

マレーシアで起きているマレー文化のイスラム化は、西洋文明の基準に合わせて伝統文化の取捨選択を行っていった明治時代以降の日本の「近代化」と似ている。セクティム演じるモハメッド・アニス氏の講演では、1970年代にクアラルンプールの独立広場の一角が同性愛者たちの出会いの場になっていた、という話も出てくる。セクティムによれば、70年代までは、結婚して子どもを作ってさえいれば、同性愛も大して問題にはならなかったという。このあたりも、「文明開化」以降の日本で起きたことと相似しているところがある。

### ・マレー語演劇とイスラム化

いろいろな人に聞いても、刺激的な仕事をしているというマレー人演劇人の名前が挙がりにくいのも、この80年代以降のイスラム化の動きと関係しているようだ。マーク・テによると、1970年代はマレー語実験演劇の黄金時代だった。ところが80年代には、70年代に活躍していたマレー演劇人の多くが筆を折ったり、保守化したりしたという。今日最も評価されているマレー演劇人の一人ナム・ロン（Nam Ron）は、最近テレビ俳優としての仕事で忙しいらしく、結局お会いできなかった。ナム・ロンの劇団のプロデューサーで批評家のファイサル・ムスタファ（Faisal Mustafa）さんにお話をうかがったところ、マレー語で政府を批判するような作品を発表すると、英語など

の場合よりもはるかに検閲が厳しく、すでに4回公演中止になったという。検閲で直前に公演中止となった場合、制作費用が全く回収できず、経済的にも大きな負担を強いられる。マレー人の観客にも、そういう作品を観に行くのを怖れる傾向があり、集客も難しくなっている。そのため、今年は作品の制作を休止しているとのこと。そういう事情もあって、たとえばマレー人でも「華人が多いペナン島の方がクアラルンプールよりも気楽に活動できる」といってペナンを拠点に活動しているアイダ・レザ (Aida Redza) のようなアーティストもいる。

#### ・「現代演劇」や「コンテンポラリーダンス」というバイアスを通じてマレーシア社会を見ることの危うさ

この状況のなかで、今日のマレーシア演劇を考える上で留意すべきことの一つは、「現代演劇」という立場からアプローチすることで、マレーシア社会を構成するごく一部の人々の声のみを聞くことになる可能性が高いということだ。もちろんマイノリティの意見に耳を傾けることは極めて重要であり、その声を表出させることは今日における芸術の重要な使命の一つには違いない。だが一方で、この社会のうちの大部分を構成している人々は、自らの意見を表明するのに、いわゆる「現代演劇」や「コンテンポラリーダンス」という手段はほぼ選択肢としてないということも念頭に置いておかなければならない。マジョリティの集団に属しているからといって、もちろん受苦や抑圧がないわけではない。たとえば、ブミプトラ政策によってブミプトラ (マレー人+先住民) と華人との所得格差は1.43倍まで縮小したというが (2009年)、それでも華人の方がずっと平均所得が高いことには変わりがない。マレーシア社会において、文化的・宗教的・経済的文脈から、華人の方がマレー人に比べていわゆる (西洋的基準における) 「コンテンポラリーな舞台芸術」へのアクセスが圧倒的に高いことは、当分変わることがないだろう。

一方で、華人にしてもマレー人にしても、マレーシアの現状に批判的な人々はたくさんいるが、それが政治活動としても表現活動としても、大々的に表に出る機会はそれほどない。セクティムによれば「インドネシアと異なり、マレーシアで大規模な反政府活動が起きにくいのは中産階級が育っているから。ブミプトラ政策の成果もあり、ここ30年ほどで極めて貧困率が低い社会が達成された。インドネシアでは生活がおびやかされている貧困層が立ち上がったが、マレーシアの中産階級は失うものが多く、外国に行くという選択肢もあるので、なかなか立ち上がらない」という。

作品を感じるだけでは十分ではない。この表現は何を、誰を代表しているのか、と問うてみる必要がある。とりわけムスリムが多数を占める地域の舞台芸術について考える際には、この問いかけは重要になるだろう。もちろん、自分がよく知っていると思いついでいる地域の作品についても同じことがいえる。

#### メモ 37 翻訳劇的身体、あるいは日本人はどのくらいバナナか

2016年3月14日

ペナン島ジョージタウンでジョージタウン・フェスティバルのディレクター、ジョー・シデックに会い、SPACの紹介パンフレットを見せたとき、ジョーは「ワオ！」と低く唸り、「これはすごい。明日フェスティバルのスタッフが集まるミーティングがあるから、そこで少し話してくれ」と言われた。翌日フェスティバルの事務所に行って、パンフレットを見せながらSPACの紹介をすると、ジョーから「この日本の劇場は劇団もあって、シェイクスピアとかギリシア悲劇とかをやっているんだ。マレーシアでこれができるか。ちょっと考えてみてほしい。日本に行くと、どんな地方都市でも、信じられないくらいクラシックのコンサートをやっている。この日本人の真面目さ、情熱はどこから来るのか」等々。なんだか皮肉が混じっているように聞こえなくもないが、少なくとも何かしら感嘆していることには間違いならしい。というわけで、今日はマレーシアからしばし離れて、日本における翻訳劇の話。

そういえば、昨年台湾の音楽プロデューサーからも、「日本は世界で唯一(!)クラシック音楽の市場がまだ成長している国だ」と聞いた。その後日本に帰ってみると、たしかに翻訳劇をたくさんやっていることに気づく。マーク・テの話では、マレーシアでは独立直後の57年~60年代半ばくらいにはけっこうシェイクスピアやイブセンなどの翻訳劇をやっていたのだが、その後は新作と翻案が中心になっていった。フィリピンやインドネシアでも大まかには同様で、今回も純粋な「翻訳劇」というのはほとんど聞かなかった。

思えば、「翻訳劇」を喜んで観に行くというのは、ちょっと不思議な文化のような気もしてきた。翻訳劇を見ると、自分も仕事で翻訳をすることがあるので、よく「これは日本語としてどうかな」などと思ってしまう。だが、冷静に考えてみれば、そもそも全く異なる論理で書かれたものなのだから、「自然な日本語にならない」のは当然のことだ。「自然な日本語」の劇が見たければ、はじめから日本語で書いた方がよっぽどいい。だがそれでもなお翻訳劇をやりたい、観たいと思うのは、その「異なる論理」を身体化してみたい、という欲望があるからだろう。

翻訳文化にはある種のヒエラルキーがある。たとえばよく翻訳される言語と、そうでない言語がある。日本で出る翻訳書の大半は英語をはじめとする西洋語を原書としている。1987年のユネスコの統計では、世界の翻訳書のなかで、西洋語からの翻訳は95%以上を占め、一方、非西洋語からの翻訳については、主要な三言語(中国語、日本語、アラビア語)を総計しても1%強に過ぎない。植民地支配の道具として、被支配者の文化を知るための翻訳も存在した。だが、翻訳作業そのものに「隷属のための翻訳」と「支配のための翻訳」の二種があるわけではないように思う。翻訳という作業には必ず、その言語共同体の一員になりたいという欲望と、その共同体への一定の敬意が必要となる。とりわけ言語の身体化を要求する翻訳劇においては、かなりの欲望と敬意とが必要となる。

明治期の「文明開化」以来、日本の「近代化」と「国語」に関しては、多くの議論が存在した。漢字廃止論、ローマ字化論もあったし、そもそも英語やフランス語などの西洋語を採用すべきではないか、という話すらあった。東南アジアの多くの国でも、

西洋諸国と出会って「近代化」する以前には「国語」が（あるいは「国家」そのものも）成立していなかったこともあり、共通語とすべき言語や表記の問題について、同様の議論があった。たとえばマレー語やベトナム語はローマ字型の表記を採用し、フィリピンやシンガポールでは英語を公用語の一つとした。

日本が「日本語」を国語として採用し、漢字仮名交じり文という表記形態を（戦後は単純化しながらも）保ち得たのには、江戸期の教育制度のおかげで、「近代化」以前から、かなり識字率が高かったということがあるだろう。そのためもあり、フィリピンやインドネシアなどと異なり、少なくとも本州・四国・九州においては、文字言語においては江戸期においても共通理解が可能だった。武家同士であれば、参勤交代のおかげで、江戸の武家言葉が上位層にはある程度普及していたようだし、共通文化としての能の謡の言葉を使えばコミュニケーションが可能だった、という逸話も（本当かどうかは定かでないが）ある。「日本語」という国語が成立し得たのには、幕末から明治初期にかけて、「西洋列強」の脅威を前に、「日本」という統一国家が必要であるという政治的合意が成立したことが大きいだろう。（この意味では大政奉還の意義は大きい。）これには地理的条件から、アジアの他の地域で進行していた植民地化を知った上で行動できたということもある。

一方で、高知のジョン万次郎が漂流した際、仙台沖で一度地元漁民に救助されたが、全く言葉が通じなかったのも、食糧だけ渡され、ふたたび漂流生活に戻った、という話を、先日神里雄大さんからうかがった。高知の漁民にしてみれば、おそらく仙台の人々の言葉も、アメリカ人の言葉も、「何を言っているのか分からない」ということに関しては、大して違いがなかったということなのだろう。林立騎さん、温又柔さんによれば、日清戦争後、占領下の台湾で日本語教育が始まったころ、秋田の人は東京から来た人とはほとんど意思の疎通ができなかったという。植民地で教えられていた「国語」は、「内地」でもまだ全面的に通用していなかった。こういった話を聞けば、日本でも別の言語を「国語」として採用するという事はそれほど非現実的なことでもなかったのかも知れないとも思う。1870年代に書かれた森有礼の国語英語化論においては、日本語の口語はこの発展しつつある国の必要を満たすには貧しすぎる、という理由が挙げられていた。これは、まだ西洋語からの翻訳語が存在しなかった時代に英国・米国で学んだ森の実感だったのだろう。

森有礼はこの10数年後に初代文部大臣となるが、この提案を実行に移すことはしなかった。日本人の多くが西洋語を話せなかったにもかかわらず、急速な「近代化」を遂げることが可能だったのは、翻訳文化によるところが大きい。この西洋語の翻訳文化があつという間に定着したのは、日本に漢語翻訳文化が千年以上前から根付いていたからだろう。多くの西洋語は、和語よりも抽象的概念の表現に適した漢語で翻訳された。あるいは、漢語に西洋語の意味が付加された、と考えてもいいかも知れない。こうして、杜甫や李白の代わりに『若きウエルテルの悩み』を読む文化が生まれる。日本の近代小説も近代劇も、翻訳文化を通じて成立した新たな日本語で書かれている。漢語翻訳文化の場合と一つ大きく違うところがあるとすれば、それは日本人が日本人のために外国語で詩を書く、という文化が根づかなかつたことだ。少なくとも夏目漱

石までの世代は漢詩を書いていたが、その後の世代が英語詩や仏語詩を普及させることはなかった。それには、東アジアにおいて中国が圧倒的に巨大な帝国だったのに対して、「西洋列強」のうちどの言語を選ぶべきかという問題もあったからだろう（これはそのうちの一国によって植民地化されたわけではなかったためでもあるが）。つまり、近代の日本人は、西洋語を通じて自らを語るのではなく、漢語経由で西洋語を日本語化して自らを語る、というちょっと複雑な（だが状況からすればそれなりに合理的ともいえる）戦略を選んだ。

ほぼ「母語」として英語を話すシンガポール人たちは、自らを皮肉を込めて「バナナ」と呼んだりするが（外が黄色で中身は白い、という意味）、振りかえってみれば自分も、ここ数十年はほとんど翻訳日本語・翻訳体日本語と西洋語ばかり読んできた気がする。たぶん自分の思考は90%以上翻訳と西洋語でできているのではないか。たまに泉鏡花を読んだり、歌舞伎や文楽などで江戸期以前の日本語に触れると、思いがけない文の構造に驚嘆させられる。

Kyoto Experimentで初演された岡田利規の新作『部屋に流れる時間の旅』は、ほとんど口語的でない、翻訳体近代小説的な言葉で会話が書かれていたが、驚いたのは、自分がそれに十分に感情移入できるということだった。思えば埋め立て地育ちの自分にとって、母語と呼べるものは、国語としての日本語以外にない。マスメディアと教育を通じて身につけてきた、この「近代的」日本語で生きてきたことが、今、日々のほとんどを翻訳体と外国語のなかで暮らしていることの準備となっていたことを思うと、なんだか恐ろしいような気にもなってくる。

『部屋に流れる時間の旅』では、東日本大震災のあと、ふだんから見慣れていた国旗が、何か希望の象徴のように見えてきた、というような話があった。国民国家は様々な外的危機を利用して統一を維持していく。だが、「内部」と「外部」の境も、「統一」の核となるものも、歴史のなかで少しずつずらされていく。小坂井敏晶の『民族という虚構』によれば、日本が西洋文化をここまで受容できたのは、植民地化などを通じて多くの西洋人が身近にいる状況を経験しなかったからだという。だからこそ、西洋文化は脅威とはならず、既知の文化・言語のフィルタを通じて、いわば弱毒化されて摂取されてきた。翻訳劇を通じて日本がこれまで培ってきた希有な身体性も、このような過程を経て形成されてきた。

「翻訳的」日本語はいつしか「内部」となり、やはり近代的発明である国旗とも自然に共存するものになる。だが、今起きている「グローバル化」は、翻訳的「国際化」の延長線上にはないような気もする。制度としての国民国家が骨抜きになっていくなかで、「国語」もやがて半透膜から全透膜的なものになっていくのかも知れない。

「翻訳」という作業は、二つの言語がそれぞれ別々の体系としてアイデンティティを主張していることを前提としている。この意味では、これは国と国とが別個に存在していることを前提とする「国際化」という概念と構造が似ている。だが、「世界化」のなかで必要となるのは、もうちょっと別の作業だろう。共通の脅威に晒される前に、いかにして共感に至れるのか。アイデンティティという概念が失われたときに、目の

前の相手と、いかなる文化的虚構も介さずに向かい合うことができるか。そろそろ翻訳劇的身体が効力を失っていく時代を見据えて、次の身体性をどう作っていくのかを考えはじめなければならない時期なのだろう。

### メモ 38 『民族という虚構』

2016年3月17日

パリ第8大学心理学部小坂井敏晶先生の著書『民族という虚構』から抜粋。（東京大学出版会、2002年。ちくま学芸文庫から2014年に増補版も。）

「遅ればせながら日本においても、複数文化やクレオールという言葉が少し前から流行し、外に開かれた国民概念が推奨されるように時勢は移ってきた。しかし民族の实在は依然として信じられている。[...]雑種性あるいは多様性を歴史的事実として確認したり、または未来に向けての目標として主張するだけでは、民族本質視に対する根本的な批判になっていない。[...]クレオール・多様・複数・雑種という表現自体がすでに対立概念として純粋性を論理的に内包していることには変わらない。本書では、そもそも民族は存在するのか、また存在するというなら、それはどのような意味においてなのか、という根本的な問いから出発することによって、様々な民族現象を新たに見直す視点を提示したい。」

ノルウェーの民族学者フレドリック・バースの説から。「複数の人間の集合が一つの民族として現れるのはその集団が固有の文化内容を持っているためではない。社会の構成員が人々の間に境界を設けて範疇化を行うことで複数の集団が区別され、それらが民族という単位として把握されることになる。換言するならば、同一性が初めにあるのではなくその反対に、差異化の運動が同一性を後から構成するのである。」

「同じ集団に属するという感覚を特に持っていないか、一括して威嚇されるような事態に遭遇するとき、外敵に対する対立項として「我々集団」が構成され、我々が一つの集団に属しているという認知が生じてくる。[...]日本の場合も、「国」と言えば藩を意味していた群雄割拠の時代から近代国家として統一され、「日本人」という同一性が形成された契機として、欧米列強の脅威が果たした役割を忘れることはできない。」

「社会心理学における実証研究は、二つの集団の間に利害対立がまったくない場合でも、単に範疇化が起きるだけで、自らが属する集団を優遇し、他の集団の構成員を差別する傾向を明らかにしている。[...]例えば硬貨を投げて裏が出るか表が出るかによって無作為に選ばれた半数の被験者を「紅組」と名付け、残りの半数を「白組」と呼ぶだけで、各被験者は自らが属する組をひいきするようになる。」

「我々はみな社会的存在であり、民族・宗教・職業・性別といった範疇から完全に自由になることはできない。歴史的に作られてきた範疇が他の範疇に取って代わられることはあっても、範疇化という認識様式自体が消えてなくなることは、人間が人間である限り原理的にあり得ない。外敵を前にして複数の集団が協力関係に入ることに

よって、その間の対立が軽減されるとしても、そこには「我々」対「彼ら」の新秩序ができただけで、「内部」対「外部」という構図自体は依然として変わらない。また二極構造を避けるべきだと言っても、民族という歴史的に作られてきた範疇は政治・経済・文化のあらゆる次元を通じて我々を縛っているのであり、観念の操作によって簡単に変更が加えられるようなものではない。」

「フランス・ドイツ・イタリア・日本といった諸国は、初めから単一民族で構成されていたのでは決してない。反対に、内部での政治的統一が可能であったために、一つの民族という表象が後ほどできあがったにすぎない。」

エルネスト・ルナンの言葉。「忘却、そしてさらに言えば歴史的誤謬が国民形成のための本質的要因をなしている。したがって歴史研究の発展は国民にとって危険な試みなのである。」

近代演劇は国民国家とともにマスメディアとして発展してきた。演劇がマスメディアでなくなった今日においても、国民国家は演劇活動の重要な支援者でありつづけている。「文化の混淆」や「クレオール化」の試みが「民族」の同一性を強化する可能性があることも、つねに念頭に置いておかなければならない。

### **メモ 39 APP ワンデイ・サミットとトッカータ・スタジオ『宇宙時代』**

2017年9月23日

アジアン・プロデューサーズ・プラットフォーム (APP) の「ワンデイ・サミット・イン・クアラルンプール」という企画に参加のため、クアラルンプールに到着。



<https://www.facebook.com/events/1204995379606135/>

トッカータ・スタジオのイー جان・タンによる企画で、マレーシアや他の東南アジア諸国（主にシンガポール）の舞台芸術制作者と、APPキャンプに参加している制作者との交流を促進させるための企画。イー جانはProPAUというマレーシアの制作者のネットワークの立ち上げメンバーでもある。

そのあと、ダイヴァースシティ・フェスティバル（Diversecity 2017 Kuala Lumpur International Arts Festival）でトッカータ・スタジオのメインアーティストで作曲家のグ・グアン・チョルの連作『2020：未来派日記 2020：Futurists' Diaries』を観劇（それにしても、この大規模な作品の本番中に上記のミーティングを企画したイー جانのバイタリティには感服）。グアンは台詞のない音楽劇とすることで、民族を超えた観客層に訴えることを目指している。300人ほどの劇場がほぼ満員。子どもが出演していることもあり、家族で来ているお客さんも多い。ファイヴ・アーツ・センターのように「英語で上演することで民族を超える」という戦略よりも、かなり広い観客層に訴えることはできている印象。



(※追記：2018年2月に『宇宙時代』として来日公演。2018年8月にはジャカルタ公演も。)

<https://tyafes-japan.com/archives/1381>

<https://www.facebook.com/events/438339336647276/>

<http://salihara.org/programs/sipfest/space-age-the-phantom-power>

## メモ 40 ファイサル・ムスタファとマレー語演劇

2017年9月24日

プタリン・ジャヤでマレー人のプロデューサー・演劇批評家、ファイサル・ムスタファ (Faisal Mustafa) に再会。

ファイサルは、マレー人ではマレーシアを代表する演劇人の一人だった演出家・劇作家ナム・ロン (Nam Ron) 作品のプロデュースをしていたが、ナム・ロンは近年テレビや映画に軸足を移し、非商業的な演劇作品にはあまり関わらなくなっているという。

昨年3月に会ったときにはナム・ロン (Nam Ron) について、「最近テレビ俳優としての仕事で忙しいので会うのは難しい」と聞いていた。マレー語で政府を批判するような作品を発表すると、英語などの場合よりもはるかに検閲が厳しく、すでに4回公演中止になったという。検閲で直前に公演中止となった場合、制作費用が全く回収できず、経済的にも大きな負担を強いられる。マレー人の観客にも、そういう作品を観に行くのを怖れる傾向があり、集客も難しくなっている。そのため、今は作品の制作を休止しているとの話だった。

ファイサルは最近、住まいのあるプタリン・ジャヤで、市営のブラックボックスの劇場と提携し、毎月小さな作品を二作品プロデュースしている。主にはスタンダップコメディ。マレーシアでは新しいジャンル。なぜスタンダップコメディなのか、と聞いたら、三つの理由があるという。一つは、表現の自由があるということ。即興的要素が大きいので、演劇と異なり、検閲のために事前に台本を提出する必要がない。とりわけマレー人の人々はメインストリームのメディアに依存している部分が大きく、マレー語でオルタナティブなメディアを作るのが重要なのだという。二つ目の理由は、とはいえ単に笑わせるだけではなく、自分でテキストを書き、社会批判的要素を含むこと。そして三つ目は、とにかく安上がりだということ。

プタリン・ジャヤはクアラルンプールに隣接する町だが、クアラルンプールが連邦直轄市として中央政府に属しているのに対して、プタリン・ジャヤは野党連合「希望同盟」が政権を握っているスランゴール州に属しているので、活動しやすいという。ただし、それが収入源になるわけでは全くないらしい。ファイサルは今、なんとジョホールバル (プタリン・ジャヤから車で6時間くらい) でスキューバダイビングのインストラクターをするのがメインの収入源なのだという。演劇制作者にしては日に焼けて健康的だと思っはいたが。

マレーシアの国民一人当たりGDPはおよそ1万ドル。日本円では単純計算で月収10万円くらい、ということになる。だがUBERの運転手に聞いてみたところ、「普通」の月給は1,000リンギット（26,000円）くらいで、すごく稼いでいる人では10,000リンギット（260,000円）くらいだという。所得格差はかなり大きい様子。2020年までに3万ドル引き上げて先進国入りする、というのが1991年に発表された「ワワサン（ビジョン）2020」計画だったが、ちょっと厳しくなりつつあって、今年からはより長期の「国家改造2050（Transformasi Nasional 2050 <https://mytn50.com/?language=eng>）」という計画になっている。シンガポール国境に近いジョホールバルの開発計画「イスカンダル計画」を通じて、大幅な所得引き上げを目指しているようだ（<http://asenavi.com/archives/10737>）。

毎月6時間かけて何度もマレー半島を縦断しながらマレー語によるオルタナティブな言説を確保しようと苦闘しているファイサルのは、ちょっと書いておきたくなった。

#### メモ 41 ビルクス・ヒージャスとレジデンス施設リンブン・ダハン

2017年9月25日

舞台芸術界で活躍しているマレー人といえば、ビルクス・ヒージャス（Bilqis Hijjas）について語らないわけにはいかない。コンテンポラリーダンスのプロデューサーで、MyDance Alliance 代表（Myは「マレーシア」の略号としてよく使われる）。最近では舞台芸術全般の批評なども書いている。

<https://tisch.nyu.edu/art-public-policy/alumni/2017/bilqis-hijjas>

<https://www.criticsrepublic.com/author/bilqis/>

<https://kldancewatch.wordpress.com/>

ちょうど今回、ビルクスが運営するレジデンス施設に行く機会もあったので、その話も。

ビルクスとは昨年ニューヨーク大学（NYU）パフォーミングアーツ科に通っていたとき、ちょうど同時期に同大学の芸術政治（Arts Politics）学科でマスターを取得していた。「すごく期待して来たけど、みんなアメリカのインテリにしとか通用しないような話ばかりで、マレーシアで役に立つことは大してなさそう」などと話していたのを思い出す。子どもの頃にもニューヨークにいたそうで、英語が堪能。

ビルクスは2015年のクアラルンプール・ダイヴァースシティ・フェスティバルで、ナジブ首相が出席しているイベントで「民主主義」「メディアの自由」「公正」と書かれた黄色いバルーンを飛ばせた際に、「騒乱を生じさせかねない形で、怒りを喚起する目的で侮辱的な行動を取った」という容疑で逮捕された。その後2018年8月によりやく無罪放免の決定を勝ち取っている。

<https://www.thestar.com.my/news/nation/2017/11/27/dancer-bilqis-hijjas-acquitted-on-charges-of-insulting-behaviour/>

<https://www.thestar.com.my/news/nation/2018/08/15/prosecution-drops-all-charges-against-woman-in-balloon-incident/>

黄色は公正な選挙を求めて野党などが 2005 年にはじめたキャンペーンのテーマカラーで、2011 年には 1600 人の参加者が逮捕され、2015 年には黄色の T シャツを着ることも罪とされた。

<https://en.wikipedia.org/wiki/Bersih>

<https://qz.com/620299/wearing-this-yellow-t-shirt-can-land-you-in-prison-in-malaysia/>

<https://www.nytimes.com/2016/02/25/world/asia/malaysia-bersih-yellow-t-shirts-ban.html>

ニューヨークで「芸術政治学」を学びたくなる気分はよく分かるが、たしかに NYU で話題になっていたのはセクシャルマイノリティや米国内の民族問題で、ポストコロニアリズムなど国外（とりわけアジア）の問題についてはほとんど語られておらず、私も少しがっかりした。

今回はビルキスの運転で、APP のメンバーたちとレジデンス施設リンブン・ダハン (Rimbun Dahan) を訪問した。



<http://www.rimbundahan.org/>

[https://www.facebook.com/rimbundahan/?timeline\\_context\\_item\\_type=intro\\_card\\_work&timeline\\_context\\_item\\_source=769848153](https://www.facebook.com/rimbundahan/?timeline_context_item_type=intro_card_work&timeline_context_item_source=769848153)

リンブン・ダハンを創設したのはビルキスの父ヒジャス・カツリ。「二十世紀後半のマレーシア建築の父」と呼ばれているという。クアラルンプールで電車に乗っているとき、ビルキスが「あれは父が建てたビル」と指さしていたのを思い出す。

[https://en.wikipedia.org/wiki/Hijjas\\_Kasturi](https://en.wikipedia.org/wiki/Hijjas_Kasturi)

<https://www.thestar.com.my/lifestyle/entertainment/arts/frame-up/2015/03/16/rimbun-dahan-cofounder-angela-hijjas-shares-new-directions/>

クアラルンプールの街中から車で30分ほどの郊外の森のなかに、広大な敷地が広がっている。そこに、父の自宅、プール、そして移築された古いマレー建築など、さまざまな建物が建てられている。小さな美術館もあり、そこで滞在したアーティストたちが寄贈していった絵などが飾られている。



移築されたマレー風の家



マレー風の家内部



プール



美術館

校倉造のような建物が、ダンススタジオなどとして使われている。



リハーサルルーム

毎年主にダンスアーティストがここで滞在製作をして、ここからランプールの街中で成果発表をする「ダンシング・イン・プレイス (Dancing in Plqce)」というプログラムが行われている。近年は東南アジア各国からアーティストを招いて行う「東南アジア振付ラボ (the Southeast Asian Choreolab)」という企画に注力している。

<https://culture360.asef.org/opportunities/southeast-asian-choreolab-2018-call-applications>

かつて TPAM でリンブン・ダハンのプレゼンテーションをしたこともあり、日本の舞台芸術にも興味を持ってくれているので、滞在してみたい方は、ぜひビルキスに声をかけてみていただきたい。

#### メモ 42 マハティール新政権発足後の状況

2018年8月12日

ジョージタウン・フェスティバル視察のため、ふたたびマレーシアに。政権交代後の状況が見たかったのと、ディレクターのジョー・シデック (Joe Sidek) が、今年で一度任期が終わると言っていたこともあった。

マレーシアが気になるのは、マレーシアの政治状況が21世紀半ば以降の日本がたどるかもしれない道先取りしているようにも見えるからだ。また、ジョージタウン・フェスティバルは、非首都型の国際舞台芸術祭として、マレーシアにおいてふじのくにせかい演劇祭に近い位置を占めているようにも思われる。(そしてアジア・センターフェローの報告書で、マレーシア分だけ書き上げられていなかったこともある…。)

クアラルンプールでマーク・テ (ファイヴ・アーツ・センター) などから選挙結果について聞いて、少し調べてみた。

今年5月9日の選挙では、マレーシア建国以来初の政権交代が起きた。マハティール率いる希望連盟は下院222議席中121議席、旧与党の国民戦線は79議席、全マレーシア・イスラム党が18議席を獲得。得票率はそれぞれ48% (希望連盟+閣外協力のサブ伝統党)、34%、17%。希望連盟はペナン州他、計8州で政権を握ることになった。

そして、なんと『Baling』にも出演していたファイヴ・アーツ・センターのファーム・ファジルが当選していた。人民公正党公認。クアラルンプールの店で出会い、「ここはぼくの選挙区なんだ」とはにかんでいた。

[https://en.wikipedia.org/wiki/Fahmi\\_Fadzil](https://en.wikipedia.org/wiki/Fahmi_Fadzil)

[http://fahmifadzil.com/mengenai\\_fahmi/](http://fahmifadzil.com/mengenai_fahmi/)

<https://www.criticsrepublic.com/2016/05/18/the-final-return-of-the-last-communist/>

選挙の争点はナジブ元首相による汚職や強権政治、そして物品・サービス税などの経済的課題だったが、旧与党の「民族別政党連合」対旧野党の「非民族別政党」という対立軸もある。後者に関しては、これまで華人・インド人の支持者が大半とみられていたところに、マレー・ナショナリズムの代名詞でブミプトラ政策の実施者でもあるマハティールが加入したことによって、新たな「マレーシア・ナショナリズム」の可能性が提起されたことが、今回の勝利の要因なのだろう。民族と宗教が争点にならず、全マレーシア・イスラム党が議席を減らしたことが、今回の選挙の特徴だった。

マハティール自身が率いる2016年結党の新党マレーシア統一プリブミ党は、旧与党統一マレー国民戦線とは異なり、「マレー政党」ではなく、「ブミプトラ (マレー人+「土着の」少数民族、プリブミはほぼ同意語) 政党」であり、マレーシア憲法153条に定められたブミプトラの優位を守る立場と見なされているために、旧与党支持者からも一定の票が流れと考えられる。

「大方の予想外だったマレーシア史上初の政権交代はなぜ起こり、どこに向かうのか」／伊賀司

<https://synodos.jp/international/21725>

「マレーシア連邦憲法 [解説と翻訳]」／鳥居高、竹下秀邦

[https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/187624/1/ias\\_024\\_026.pdf](https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/187624/1/ias_024_026.pdf)

地域ごとに見ると、希望連盟はクアラルンプールでは全議席、スランゴール州では9割、ペナン州では85%の議席を獲得した一方で、クランタン州では64%の議席を全マレーシア・イスラム党が獲得し、希望連盟はゼロ。地域による分断も明確になっている。  
[https://en.wikipedia.org/wiki/Malaysian\\_general\\_election,\\_2018](https://en.wikipedia.org/wiki/Malaysian_general_election,_2018)

だがFree Malaysia Today紙によれば、希望連盟に投票したのは、華人の約95%、インド人の70-75%。そのため、国民戦線の一角を占めている民族政党のマレーシア華人協会とマレーシア・インド人会議はほとんどの議席を失ってしまった。だが、マレー人で希望連盟に投票したのは25-30%に過ぎなかったという。  
<http://www.freemalaysiatoday.com/category/nation/2018/06/14/report-95-chinese-but-less-than-30-malays-voted-for-ph/>

そして華人として初の財務相（民主行動党事務局長のリム・グアンエン）が誕生し、初めてマレー人の閣僚が5割を切ったという。（サバ伝統党の閣外協力を得て、マレーシア東部出身の少数民族閣僚が入ったためもある。）  
[https://en.wikipedia.org/wiki/Cabinet\\_of\\_Malaysia](https://en.wikipedia.org/wiki/Cabinet_of_Malaysia)

人口の過半数を占めるマレー人の間では不満も表出し始めている。そのため、政権側も改革をどのタイミングでどこまで打ち出すべきか、かなり慎重に見極めている状況とのこと。マハティールは二年後にアンワルに政権を禅譲すると言明しているが、アンワルは5月16日にようやく恩赦を得て出獄し被選挙権を回復したものの、まだ議員にもなっていない（アンワルはかつてマハティールの右腕だったが、マハティールに叛旗を翻した際に、同性愛等の嫌疑で告発された）。

人民公正党党首でアンワルの妻のワン・アジザは副首相となった。人民公正党は全民族に開かれた政党で、47議席と、現与党の最大勢力。マハティールのマレーシア統一プリブミ党は13議席に留まっている。アンワル政権成立に至るまで、試練の二年間になりそうだ。

#### **メモ 43 『ストライプス・アンド・ストロークス』、性的多様性をめぐる新政権の対応**

2018年8月14日

新政権が直面している試練を象徴するのが、8月4日に開幕したジョージタウン・フェスティバルでの枠内で行われている展覧会『ストライプス・アンド・ストロークス STRIPES AND STROKES』をめぐる問題だ。クアラルンプールで会ったマーク・テから話を聞いて、「見ておいた方がいい」と勧められた。

<https://georgetownfestival.com/programmes/stripes-and-strokes>



# STRIPES AND STROKES

MOOREYAMEEN MOHAMAD

**4 AUG - 2 SEP 2018**

11:00am - 6:00pm  
Dewan Sri Pinang

**PHOTOGRAPHY EXHIBITION**

**Project Concept**

The photography project is a collection of 60 individual portraits of Malaysians from a cross section of society. Each subject is photographed posing with the Malaysian flag to commemorate our nation's 60th year of independence.

The rationale for the portraiture project featuring the Malaysian flag or *jalur gemilang* (glorious stripes) is two-fold:

Firstly, to show that as Malaysians we can and should get physically close to the flag, rather than it just being a banner on a high flagpole, displayed in government offices or appearing on our television screens.

Secondly, the portraits, which eventually will be compiled into a book, serve as a time capsule to capture what Malaysians look like in the 60th-year of independence.

Behind their eyes lie their own stories, struggles and triumphs for the past, present and future of their own, and, collectively, of Malaysia.

#GTF2018

[www.georgetownfestival.com](http://www.georgetownfestival.com)





## ABOUT THE ARTIST

**Mooreyameen Mohamad** was born in Kuching. He graduated from University of Edinburgh with a B.Eng (Hons) in Mechanical Engineering and from New York Institute of Photography.

He joined Shell Malaysia in 1998 and his first major assignment was to be the Area Engineer for the Northern territory, based in Butterworth, Penang. Since then he has worked in Kuala Lumpur, The Hague and Jakarta. In 2011, Yameen produced the Evening Edition for BFM radio, culminating in a nomination for the International Visitor Leadership Program. In 2012, he joined Petronas Lubricants International and spoke at industry conferences in Singapore and London. In 2015, he joined Petra Group and is now the Chief of Staff.

Mooreyameen specialises in portraiture and 'Stripes and Strokes' is his first major project.

Mooreyameen is currently based in Kuala Lumpur with family members in Kuching as well as in Perth, Australia. He enjoys learning new recipes and testing them out on his party guests.

### Solo Exhibition

2017 | 60x60 – a photography project in commemoration of the 60th Merdeka



MOOREYAMEEN  
MOHAMAD

“ I have been struggling with the idea of Malaysia being my country for a while. While I have no legitimate reason to do so (because I have a birth certificate that prove beyond any doubt my nationality), there is this nagging feeling that I am not quite complete, or fully the person that I should or could be.

There are many days in a year when I feel like I do not recognise my own country. Sometimes I think due to the influx of what looks like ultra-conservative practices, it feels like I am looking at a country that is uncomfortable with itself, one that feels it is inadequate, unclear, and impure.

These thoughts has led me to seriously entertain the idea of emigrating and starting over in a more stable, self-confident, emotionally-secure country. I can clearly see why so many have done so in recent years.

It seems perhaps I could build a better life, free from the intrusion of good-for-nothing, power-hungry religious "authorities", free from the systemic cronyism, nepotism and blatant corruption... I could reinvent myself, start over and build a life with achievements based on my own talents and hard work, instead of getting somewhere because of whom I know and whom I owe favours and allegiance.

But when it came down to it, I felt like I would be missing something really big should I ever leave the country, and it was simple: I would sorely miss my fellow Malaysians.

Over the past 18 years that I have lived in Kuala Lumpur, I have met and made friends with some of the most amazing people. And they are amazing not just because they are famous or kind and generous to me, or highly accomplished people in one way or another... but they, I realise, somewhat selfishly, are amazing because they represent to me the potential of a life here in Malaysia: accomplishment against the odds, kindness against a background of intimidation, generosity... over and over, and beauty... everywhere!

And then I saw it: the colours, just as I am a child of a mixed marriage, I have been surrounded by people of various skin colours, incalculable number of different family backgrounds... and life goals. It's all possible here. And the possibilities are still endless.

There is only one thing that could sum up all that I love about Malaysia, and that is the vibrant, self-confident colours in the 'Stripes of glory', Jalur Gemilang, the Malaysian flag.

Each of the subject that I have included in the book, famous or otherwise, is an individual that represent the wonderful landscape of Malaysian society. I am proud of each of them. And I want to capture this feeling of pride, and hope - because our memories are fragile - so I will forever remember why I never made the move to leave.

These photos represent not just pride and hope, but also the rejection of religious extremism, authoritarian intimidation and a rebellion against all that try to suppress our stubborn desire to live a life full of colour and glory, just like our flag.

Mooreyameen Mohamad  
September 2017

”

ここでは、マレーシアの様々な有名人がマレーシア国旗をつけてポートレートが展示されているが、その中には有名なトランスジェンダー活動家のニシャ・アユブ

(Nisha Ayub) とLGBTQ活動家のパン・キーテク (Pang Khee Teik) が含まれていた。これに抗議する動きがあった (ただしこの展覧会はそもそも昨年独立60周年を祝ってクアラルンプールで実施されたもので、その際には問題になっていなかった)。それを受けて、首相官房宗教問題担当官のムジャヒド・ユソフ・ラワ (Mujagid Yusof Rawa) からペナン州政府事務局に、二人のポートレートを外すよう命令が下った。

ジョー・シデックはこの8年間、ペナン州政府から、プログラムに関して干渉されることは全くなく、このフェスティバルをマレーシアにおいて数少ない「表現の自由」が保証される場としてきた。だが、ジョーはペナン州政府からの命令に応じて、二人のポートレートを外させた。もしそれに応じていなかったら「ペナン州政府は寛容な態度をやめて、チントラワルナ (Cintrawarna、政府観光・文化省などがクアラルンプールで開催している大型フェスティバル) 的なメインストリームのフェスティバルをやろうとしたら」とジョーは語っている。ジョーはかつてトランスジェンダーコミュニティの支援活動をした際に、殺人の脅迫を受けたこともあるという。これはジョー自身がマレー人 (=制度上はムスリム) であることとも関係している (たとえば華人で非ムスリムであれば、同性愛もトランスジェンダーも罪ではない)。

このジョージタウンでの展覧会では、取り除かれたポートレートの代わりに、「...はここにいました (...was here)」という表記を残した。そして何人かの著名人は自分のポートレートを外すように要求し、今では半分近いポートレートが取り除かれ、同様の表記だけが残っている状態になっている。そしてニシャとパンのポートレートはSNSや報道を通じて、世界中に流通することとなった。

<https://artsequator.com/gtf-stripes-and-strokes/>

このように書くと、撤去命令を出した政治家は強硬なイスラム主義者なのかと思うかも知れないが、実はそう単純な話でもない。ムジャヒド・ユソフ・ラワは、かつての全マレーシア・イスラム党党首ユソフ・ラワ (「クランタン州と全マレーシア・イスラム党」の項を参照) の息子で、父と同じくペナン出身の下院議員。だが、キャリアを見ると、典型的なイスラム指導者とは少し異なる。スンニ派神学の権威とされるカイロのアル＝アズハル大学では神学ではなくアラビア語で学位を取得し、マラヤ大学で政治哲学の博士号を取得。はじめ全マレーシア・イスラム党員として2回当選したが、2015年には国民信託党結党に加わった。

[https://en.wikipedia.org/wiki/Mujahid\\_Yusof\\_Rawa](https://en.wikipedia.org/wiki/Mujahid_Yusof_Rawa)

今回の選挙では、全マレーシア・イスラム党から対立候補が出ていたが、なんとか議席を確保している。イスラム政党所属ではあるが、選挙キャンペーンでLGBTQ市民の市民権を主張していたくらいで、「寛容なイスラム」を標榜する政治家である。この一件のあと、ニシャ・アユブからの面会要求に応じて、「イスラムは信者に他者を傷つけるよう焚きつけるべきではないし、(トランスジェンダーの人々の) マレーシア市民権が否定されるべきでもない」と断言している。

<https://www.thestar.com.my/news/nation/2018/08/11/mujahid-meeting-was-over-lgbt-discrimination/>

非常に好意的に見ようとするれば、政府官房の命令も、沈黙を貫いているペナン州政府の対応も、深謀遠慮の末のこと、と解釈できないでもない。

#### メモ 44 マレーシア華人の言語状況

2018年8月16日

ジョージタウン出身・在住のGrab運転手エルトンさん（華人）のお話。ペナン島の中華系住民の多くは福建から来ていて福建語が圧倒的な第一言語。福建麵（ホーキエンミー）の店が多い。主に南方系で、他に広東語、海南語、客家語、等々。

一方でマレーシア全体では広東からの移民が最も多く、クアラルンプールでは広東語が第一言語。エルトンさんは若い頃クアラルンプールで働いていて、当時の共通語はマレー語だったので、クアラルンプールの華人とはマレー語で話していたと言う。今は英語が華人のあいだの共通語として使われる場合が多い。だが中国が経済大国となつてからは普通話（標準語）が中華学校で教えられるようになり、学ぶ人が増えている。

現在、中国はマレーシアの最大の貿易相手国。マハティールは新政権発足時に中国主導の「東海岸鉄道」などのインフラ整備計画見直しを発表したが、同時に国産車プロトンへの中国メーカーとの協力拡大なども確認し、貿易の拡大を目指している。

[https://www.nikkei.com/article/DGXMZ034357000Q8A820C1FF8000/?n\\_cid=SPTMG002](https://www.nikkei.com/article/DGXMZ034357000Q8A820C1FF8000/?n_cid=SPTMG002)  
（プロトンは2017年に中国企業に事実上買収されている。）

[https://www.toyro.co.jp/img/img-report/b.asia\\_1707.pdf](https://www.toyro.co.jp/img/img-report/b.asia_1707.pdf)

エルトンさんは香港映画で広東語を学んだというが、その香港でも普通話が普及しつつあり、マレーシアでも「中国語＝普通話」という状況に近づきつつある。ここ10年ほどで、外中華圏の普通話化が急速に進んでいる印象。舞台芸術界でも、大陸部中国大陸との結びつきは確実に強まっている。

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ033939260Y8A800C1000000/>

若いマレーシア華人に進学や就職の話を知ると、クアラルンプールか地元か、というよりも、北京か台北かシンガポールか、ロンドンかニューヨークかシドニーか、といった話になる場合が多い。マレーシアで中国語と英語で暮らしていると、そういう世界の見え方になるのだろう。マレーシア出身の友人で、北京とニューヨークを拠点に活動している舞台芸術制作者がいるが、今後も同様の例は増えていくだろう。

#### メモ 45 西尾佳織／リー・レンシン『どうにか生きていく Navigating living』

2018年8月18日

ふじのくにせかい演劇祭2015で『例えば朝9時には誰がルーム51の角を曲がってくるかを知っていたとする』を作ってくれた鳥公園の西尾佳織さんが、マレーシアの振付家リー・レンシン（F/T2016に参加）と、マレーシア・シンガポールで「からゆきさん」についての二ヶ月半のリサーチを経て試演。先週末にクアラルンプールのファイ

ヴ・アーツ・センターで二回公演し、今日はジョージタウンのマレー通りにあるセクティムのアートスペース「シンケ」にて（30人ほど収容で、ほぼ満席）。



<https://www.facebook.com/events/318924512179261/>

クアラルンプールの中国語紙『光明日報』による取材記事

<http://epaper.guangming.my/guangmingepaper/mobimax/reader/magazine/index.php?params=%7B%22ct%22%3A%22Fkd5rM6273fQdIWIh%2BsT7nkxRSuuMgQcJGpVooo15s%3D%22%2C%22iv%22%3A%22ba69b9064a93326e330acae5bb8edf71%22%2C%22s%22%3A%2215b74c455fd9c44e%22%7D#page/33>

西尾さんは5歳から11歳までクアラルンプールで育ったが、日本ではミドルクラスだったのに、マレーシアではプール付きのコンドミニアムで、日本人学校と家の往復で現地の人と話す機会もほとんどなかったことに違和感をいただいていたという。「ペナン島の日本人墓地には日本人女性の墓が40基ほどあるが、現地のマレーシア人は誰もそれがどんな人だったのか知らない」という話を聞いて、ジョージタウンを拠点に、からゆきさんに関するリサーチをはじめた。西尾さんによれば、マレーシアにある12の日本人墓地に眠る日本人の八割がからゆきさんだったという。

短編戯曲「私は純愛を爆破したい」、レクチャーパフォーマンス「日本の解決～近代化とからゆきさん～」、短編戯曲「牛女」（今回は全て英語上演）、リー・レンシンによるクアラルンプール郊外の自宅近辺での「フェイクな儀式」をめぐるレクチャ

ーパフォーマンス、という盛りだくさんの構成。日本の近代化に大きく「貢献」したからゆきさんをめぐるリサーチを通じて、今日の恋愛をめぐる言説や移民問題を理解しようとする試み。

今年12月22日に山口情報芸術センター(YCAM)で、マーク・テのキュレーションによる展覧会「呼吸する地図たち」の枠内で、これをもとにしたレクチャーパフォーマンスを行う予定とのこと。今後の展開が楽しみ。

<https://www.ycam.jp/events/2018/the-breathing-of-maps/>

## メモ 46 ジョージタウン・フェスティバル 2018

2018年8月19日

前述の通り、ジョージタウン・フェスティバルの創立者でディレクターのジョー・シデックは、今年で一度任期が切れ、来年以降に関しては再度公募に応募することになるといふ。これまでは欧米のアーティストの大型舞台芸術作品を目玉として呼ぶことが多かったが、今年はマレーシアとアジアのアーティストの作品が多いようだ。

「とりあえず最後なので、目立つものより意味があるものをやりたいと思った」とジョーは語る。選挙の結果が予測しにくい状況だったために、思うように資金が集まらなかったこともあるとのこと。

ジョージタウン・フェスティバルの8割は無料のイベント。公式サイトによれば、「来場者136万人、976イベント」などとある。2015年の来場者が25万人だったとのことなので、8年間通算の数字だろう。

<https://georgetownfestival.com/>

[https://en.wikipedia.org/wiki/George\\_Town\\_Festival](https://en.wikipedia.org/wiki/George_Town_Festival)

私が見たイベントの多くはほぼ満席だったが、ジョーによれば、地元の観客がなかなか増えず、今でも集客が大きな課題だと言う。有料イベントでは観客の中に西洋人も1、2割はいる。

とりわけ評判がよく、ジョーも「今のところ一番印象深かった、毎年でもやる意義があると思った」と語るのは、『Say no more』という作品。オーストラリア、インドネシア、マレーシアから、女優6人と一般女性20人が参加して、障害当事者やその親などが結婚や性の問題について語る、というもの。

<https://georgetownfestival.com/programmes/say-no-more>

タイミングがあって観られたのは、「島から島へ」という台湾特集。演劇、ダンス、サーカス（舞台作品は主に土日の上演）、映画、デザインと盛りだくさん。



『カハブ！ もう話されていない言語？』台湾の先住民族カハブ族の言語カハブ語をテーマにしたサーカス作品

[https://www.georgetownfestival.com/files/shares/GTF2018\\_Isle%20to%20Isle%20Booklet%20\(Online\).pdf](https://www.georgetownfestival.com/files/shares/GTF2018_Isle%20to%20Isle%20Booklet%20(Online).pdf)

同時にペナンの歴史を語る地元の布袋戯（ポテヒ、中国南部を起源とするグローブパペット）劇団の上演もあり、南方系華人の多い二つの島が辿ってきた道を対比して見られる仕組みになっていた。

<https://georgetownfestival.com/programmes/kisah-pulau-pinang-the-penang-story>

この布袋戯作品の第一部（この部分は昨年東京芸術劇場などでも公演されたとのこと）は、ペナンの多文化社会の起源を描くもので、20世紀初頭に中国大陸から苦力（クーリー）としてやってきた青年と、ペナン生まれでマレー語を話すニョニヤ（マレー文化を取り入れた華人女性）との出会い、そしてインド南部からやってきたタミル語を話すムスリム商人との友情を描いている。音楽や歌にもこの多様性が反映されている。アチェ通りにあるモスクは、19世紀にアチェ（現インドネシア、スマトラ島北部）のスルタンが建てたもので、東南アジアのムスリムたちはメッカに向かうときにここに立ち寄って説教を聞いたものだという。

<http://hatimalaysia.com/1571>

[https://www.tais.ac.jp/guide/latest\\_news/20171101/52198/](https://www.tais.ac.jp/guide/latest_news/20171101/52198/)

今年は新作として日本占領時代を描く第二部が加わっていた。空爆、華人粛清事件、抗日運動など、当時を体験したお年寄りたちからの話を聞いて構成していったとのこと。



オンバ=オンバ・アート・スタジオ『ペナン物語』

今回のプログラムでとりわけ感じさせられたのは、巧みなバランス感覚だ。オープニングイベントはマヨンやワヤンクリなど、「マレー文化揺籃の地」クランタンの伝統芸能を紹介するものだった。華人が多いペナンであえて、政治状況が全く逆のクランタンにフォーカスしているわけである。ジョーが子どものとき、はじめての芸術体験が、父親に連れられてクランタンで観たマヨンだったという。マレー伝統文化への愛着をアピールしながら、それが危機に陥っている状況にも目配せをしている。国立芸術学校ASWARAやジョゼフ・ゴンザレスが創設したASKダンスカンパニーも出演。

<https://georgetownfestival.com/programmes/kelantan-a-living-heritage>



ジョージタウン・フェスティバルのメイン会場の一つ、Dewan Sri Pinang

同時に行われていた、1930年代にマレー語教育を受けたフランスの文化人類学者ジャンヌ・キュージニエが2ヶ月クランタンに滞在して行った伝統芸能調査に関する展示も興味深いものだった（フランス大使館を通じてケ・ブランリー美術館などが協力）。これが先述の『ストライプス・アンド・ストロークス』と並べて、フェスティバルのメイン会場で展示されているというのも、面白い構成。

<https://georgetownfestival.com/programmes/a-french-ethnologist-in-kelantan>

GEORGE  
TOWN  
FESTIVAL  
PENANG • MALAYSIA

EXHIBITION

A FRENCH ETHNOLOGIST  
IN KELANTAN  
1933



*Jeanne Cuisinier*

"Eight p.m. Shadow everywhere, and everywhere lights that blink and await. There will be at least two thousand people coming, out of the ten thousand inhabitants of Kota Bharu, who will not sleep or, if they sleep a little, will get up at midnight to see the most beautiful part of the show."



Ma'Yong Dance



Ma'Yong Dance

マハティール政権の新国防相は6月、サウジアラビアにおける対テロ・イスラム軍事連合への派兵を見直す考えを示唆した。

<https://thediplomat.com/2018/06/will-malaysia-end-its-military-presence-in-saudi-arabia/>

さらにマハティール首相は今月初めの来日時に、日本の「平和憲法」に倣った憲法改正を示唆している。

<http://www.tokyo-np.co.jp/article/national/list/201808/CK2018080802000137.html>

これには、中東での紛争に巻き込まれることを避ける意図もあるだろう。ナジブ時代に深まったサウジとの関係も見直されることになると、「アラブ化」傾向に歯止めがかかる可能性がある。

マーク・テは「今は政権交代で期待感があり、ちょっとナショナリズム的な高揚感がある」という。マレーシアではふつうのアパートの軒先から屋台まで、至るところに国旗がかかげられているが、それぞれの人の「国」への期待は微妙に異なっている。そのなかで、現在と過去を見つめながら、新たな期待を形づくっていかようとしているアーティストたちの慎重な高揚感も感じることができた。